

日本語諸方言の四モーラ畳語を比較する試み*

高山 林太郎

キーワード：日本語諸方言 比較方法 四モーラ畳語 アクセント 長音

要旨

日本語諸方言（青森市，盛岡市，東村山市，東京，岡山市，尾道市，広島市，京都，神戸市，淡路島，徳島市，高知県，甕島，沖永良部島）の4モーラ畳語（ピカピカ（と），アカアカ（と），楽々（と），偶々，ピカピカ（だ），満々（だ），島々（が），ブツブツ（が），ワンワン（が）等）を比較し，そのアクセントを本土と琉球の共通の祖語に再構することを試みる（順に*HLHL(L)~*HLLL(L)，*LLLH(L)，*HHHH(L)，*HHHH，*LHLH~*LHHH，*HHHH，複合名詞同様，*LHLH~*LHHH，*HLHL~*HLLL）。また，琉球のセグメントに現れる「ピカーピカ（と），アカアカー（と）」のような長音について考察し，過去のアクセントの影響で出現した可能性を述べる。

1. はじめに——何故4モーラ畳語を扱うのか，研究の経緯，調査範囲

上野（2006：5）は「3拍名詞は対応¹」に問題があることが以前から知られており，原因と

* 筆者による畳語のアクセント等の調査にご協力下さった各地の方言話者の皆様に，厚く御礼申し上げます。その芳名を右に記します（あいうえお順，匿名希望の方以外）：浅見勇氏，池田康子氏，内田栄二氏，江藤又次氏，小川豊博氏，葛西慧紀氏，金子光一氏，川合萬次郎氏，川上忠志氏，小山昇氏，佐藤忠磨氏，嶋田憲三氏，下原瑞恵氏，城口寛治氏，中岡恒子氏，中谷眞也氏，野崎征吉氏，平嶺廣教氏。

また，本稿にデータを提供して下さい，日本語の調査研究をご専門とする大学院生の皆様と，その方言話者の皆様に心より御礼申し上げます。中澤光平氏（東京大学，日本学術振興会特別研究員（DC1））は淡路島で増水一二氏のご協力のもと畳語のアクセントを調査しました。徳永晶子氏（一橋大学，日本学術振興会特別研究員（DC2））は琉球で大蔵ユキ氏，岡村隆博氏をはじめとする多くの方々のご協力のもと畳語のセグメントを調査しました。大槻知世氏（東京大学）は自身を含む青森市話者2名に基づいて畳語の文法を調査しました。

また，本稿においてありうる不備や誤りは，もちろん全て筆者の責任ですが，本稿の論を展開する上での知識やアイデア・分析を提供して下さい，中澤光平氏（アクセントの通時論の先行研究に関して），徳永晶子氏（琉球のセグメントに関して），大槻知世氏（青森市の文法に関して）に，深く感謝いたします。

¹ 概説を記す。金田一春彦らが開発した「類別語彙」や，琉球で現在も開発され続けている「系列別語彙」のような一定の語群（「語類」や「系列」と呼ぶ）を設定することで，日本語諸方言の単純語の名詞などのアクセントの規則的な音韻対応が見出される。拍間のピッチ（音程）の上昇（↑），下降（↓），小幅な下降（!），拍内の下降（∩），高い拍（H），低い拍（L），拍内で高から低へと下降する拍（F）のような記号を用いる。

例えば「鼻，川，花，肩，雨」に代表される2拍名詞の5つの語類（順に1,2,3,4,5類），平安時代末期の京都では順に「[HH, [H], LL, L[H], L[F]]」と別様に発音していたことが，『類聚名義抄』等に施された「声点」から分かっているが，現代の京都では「LL」が「[H]L」に合流している（3類が2類と同じ発音に変化）。また東京では（「が」の付いた形で）順に「L[HH, L[H]L, L[H]L, [H]LL, [H]LL」と発音する（2類と3類，4類と5類が同じ発音に変化）。帰納法的に言えば，そもそもこのような語群が存在するのは，同じ1つの古い日本語から出発してきたからだと考えて，その当時のアクセント体系を再構築して系統図を描くという「比較言語学」的な試みが，服部四郎・金田一春彦以来，日本語アクセント研究の主目的の一つとなっている。

語群を設定できるのは，名詞では1,2,3拍までで，4拍以降は不可能とされる（動詞では4拍も可）。原因は，一つには使用頻度の高い基本的な言葉は頻繁に耳から聞いて覚える一方で，使用頻度の低い言葉は本で読むなどして覚える場合も少なくなく，昔ながらのアクセントが伝承されない為である。もう一つは，4拍以上の名詞には畳語・複合語が多くなるが，複合語では単純語で起こる規則的な音変化が起こらず，独自の歴史を辿るからである（その点が複合名詞の研究で示されている）。このような研究の文脈の中で，本稿では4モーラ（≒拍）の畳語のアクセントを扱う。問題となるのは，音韻対応の有無や，単純語や複合語との異同である。

して「本来、対応は古くから口頭で連綿と伝承されてきている日常語において成り立つものであるから、その地域での生活語でないもの、文字を通して入った単語など、伝承語でないものには当てはまらない」と述べる。他の原因として、3拍以上では複合語扱いの語の割合が増え始め、複合語規則に捕われて単純語の規則的変化の影響を脱し、音韻対応が曖昧化する可能性も考えられる。他方で上野(1988:55)はIV拍、IV・V拍の単純動詞1,2類に2つの式と次末下げ核の有無の区別を再構しており(*[ウタ!ガ]フ(終止形), *[ウタ!ガ]フ(連体形), *[コシ!ラ]フ, *[コシ!ラ]フル, *アラ[ハ]ス, *アラハ[ス], *アラ[ハ]ル, *アラハル[ル]), 条件次第では4拍語を扱ってよい。結局、実際に音韻対応が存在するか否かが重要である。なお音調の表記法は上野(1992,2006)に倣い、各所から引用する際もこれに改める。

さて、金田一(2005a:334-335)は「[ガ]ラガラと」と「ガ[ラガラに]」では東京のアクセントが異なり、「シ[ロ]イ・[シ]ロクのように、[ガ]ラガラ対ガ[ラガラ]もやはり活用と言うべきではないか」と指摘する。情態副詞「[ガ]ラガラと」と結果副詞「ガ[ラガラに]」は同じ副詞だが(この二分法を用いる)、広く形容動詞語幹「ガ[ラガラ(だろ, だっ, で, に, だ, の, なら)」が無核なので、副詞と形容動詞²という異なる品詞が「派生」されている。この指摘を受けて³、本稿では「4モーラ豊語」を調査して方言比較を行う。品詞を変える派生が問題となるため品詞は限定しない。4モーラ豊語は2モーラ(1,2音節)の要素が2つで1語となるものを指す(内部境界で連濁するものや漢語も含む)。/C(子音), S(半母音), V(母音), R(引き音), N(撥音), Q(促音)/ に対して「2モーラの要素」は/CSVCSV, CSV, CSVV, CSVN/となる(/C, S/ がゼロの場合を含む。/CSVQ/ は問題⁴があるため扱わない)。「2モーラの要素」という単位自身で単語になれるものもなれないものも扱う(例えば擬音語「[ワ]ンワン(と)」の「[ワ]ン(と)」は可能だが、擬音語「[ゴ]ロゴロ(と)」の「[ゴ]ロ(と)」や擬態語「[ピ]カピカ(と)」の「[ピ]カ(と)」は不可能である。「擬音語/擬態語」の二分法を用いる)。品詞は主に情態副詞(オノマトペや準ずるもの; 東京の例: [ピ]カピカと, タ[カダ]カと)と派生形の形容動詞(ピ[カピカだ]だが、他にただの形容動詞(飛[び飛びだ], ただの副詞(た[びたび], 感動詞([や]れやれ), 名詞(く[に]ぐに)がある(原則, (準)オノマトペと漢語はカタカナ, 他はひらがなで表記する)。なお東京の旧市内と東村山市では「[ピ]カピカ」の類の1モーラ目が無声化する環境で「ピ[カ]ピカ」などとなる⁵。「情態副詞, 形容動詞, ただの副詞, 感動詞」は順に「ト副, 形動, 副詞, 感動」と略すことがある(「名詞」は「名詞」)。

² 東京の狭義の形容動詞の連体形は「な」であって「の」でない。本稿では「形容動詞」を広義に用いる。

³ 金田一春彦によるその他の指摘についてもここに記しておく。金田一(2005b:573)は、中輪式のうち東京では「イ[ノ]チ」の類が「[カ]プト」の類に類推して合流した(但し金田一(2005c:70-76)によれば一部の語彙は合流が遅れた)と推定し、東京で副詞の「コロコロ・クルクル」の類がL[H]LL型でなく[H]LLL型であるのは3拍名詞の変化の波に乗ったものであろうと推測している。また金田一(2005a:340-341)は、「擬態語の活用については、まだ十分な調査がされておられません。私の現在の予想では、擬態語が活用するのは、京都・大阪、あるいは東京・広島のような中央部で、九州などでは活用しない」と述べているが、高山(2013d)は九州以南である甌島でi群とv群が、沖永良部島でi群とii群が対立することを指摘した(語群については後述)。

⁴ 例えば東京では「[グ]ツグツと, [グ]ーグーと, [グ]イグイと, [グ]ングンと」に対し「[グ]ググツと(引っ張る)」はアクセントが異なる。他方で例えば「[パ]ッパと(払う)」は頭高型と解釈できるが3モーラである。

⁵ 無声化の有無で相補分布するため、本稿では便宜上「[ピ]カピカ」として扱うことがある。

調査項目は『新明解日本語アクセント辞典』（「新明解」と略す；東京方言＝標準語＝共通語に基づく）と『日本国語大辞典第二版』（「日国」と略す；東京・京都方言のアクセントが記載される）に載る項目を基礎として若干補充した4モーラ量語885項目と⁶、その一部の前部要素の単純語で、そのほか文法調査等も実施した。また、これらの辞典から東京方言（話者は秋永（1999:35）参照）と京都方言（1897-1912年生れの数名の話者）のデータを得た。

2012年2月以来の研究⁷を総合し、未発表の論考・データと共に本稿を記す。なお「外輪式、中輪式、内輪式、中央式、九州二型、琉球多型」の調査データ等に基づいて論じ、「伊吹式、讃岐式、真鍋式、加賀・能登中央式」は今後の課題とする（系統を表わす用語は金田一（2005b）、上野（1985,1987）等参照）。また、本稿で個別の方言の詳しい解説はしない⁸。

2. 東京方言（中輪式）、京都方言（中央式）——語群を設定する

本稿で4モーラ量語を方言比較する為の仮説的語群を設定する：「i群（i1群、i2群、i3群）、ii群、iii群、iv群、v群（v1群、v2群）、vi群、vii群、viii群、ix群」。i1群、v1群などの下位群には音調上の特徴はあるが所属語彙の排他的な特徴は無い（後に岡山市、東村山市方言を例に説明する）。他方でi群などの上位群には所属語彙に関する「おおむね」排他的な特徴があるが、i群とv群が緩やかに単一の群をなすなど、相互の派生関係も見られる⁹。i群、ii群、iii群はト副、iv群は副詞（、ト副）であり、文中で用いられる。v群、vi群は形動、vii群は名詞（、形動、副詞）、viii群は名詞（v群から生産的に派生する）、ix群は名詞（、副詞、感動）（i群の擬音語から生産的に名詞が派生する）であり、文中・文末で用いられる。

i群、v群の代表例（東京）は「[ピ]カピカと、ピ[カピカだ]（原則和語）だが、他方で「[ユ]サユサと、ラ[ブラブだ]」は順にv群、i群に属しにくい。ii群、iii群、iv群、vi群、vii群、

⁶ 「[デ]カデカと、ヒ[ニヒニ]」等、選定時の見落としが後に判明した語がある。他方で、「[ピ]カピカと、ピ[カピカだ]」の類は全てを調査し切ることが現実的でなく、意味のバランスを考えて調査項目を制限・選択した。

⁷ 本稿に至るまでの経緯を簡単に説明する。調査票作りは2012年2月に開始した。高山（2012b）では上記の東京・京都のデータを元に、岡山市・青森市の調査データと比較して、4モーラ量語においては、表現性の高い「オノマトペ」であっても語彙性の高い部分を見分けられること、単純語や複合語でなく「量語」であっても方言間の音韻対応が存在することを、数量的な分析によって示した。

高山（2012d）では東京都東村山市と青森市で、4モーラ量語の形容動詞に語幹末核の有無による語用論的意味の区別が見られることを指摘した（後に岩手県盛岡市でも確認）。更に、複合動詞に関する高山（2012c、2012e）のデータと併せて、イントネーションではなくアクセントが語用論的意味を表わす場合があることを、高山（2013a、2013b、2013f）で初めて明示的に指摘した。高山（2013d）では4モーラ量語の情態副詞と形容動詞に限り、そのアクセントを通時的に考察した。高山（2013e）では広島県尾道市・広島市において4モーラ量語の名詞が、情態副詞どうしの合流に巻き込まれるという特殊な類推変化が見られることを指摘した。高山（2013h）では4モーラ量語がその方言の本来の出自（＝基層方言）の手掛かりとなる点を指摘した。

⁸ 青森市のアクセントの音韻解釈に関しては、先行研究の説明では捉え切れない現象について高山・中澤・大槻（2012a、2012b）で扱った。沖永良部島のアクセントは高山（2013c）で改めて音韻解釈を示した。上飯島里方言は高山（2013h）で簡単に解説した。その他の地点のアクセントは豊富な先行研究の通りである。

⁹ 品詞が異なるため語幹の意味により一方の群に属しにくいことはあっても、「排他的」な違いとはならない。例えば Kageyama (2007: 37-39) は「There is good reason to believe that some of the four categories 【＝副詞、動詞、形容動詞、名詞】 are derived from the others, rather than that the four categories are listed separately in the lexicon or have their syntactic categories underspecified in the lexical entries.」とし、I類（スゴスゴ等）は「～と」のみ可（副詞）、II類（ズキズキ等）は「～と・する」が可（副詞から動詞を派生）、III類（アツアツ等）は「～だ・が」が可（形容動詞から名詞を派生）、IV類（ヒヤヒヤ・イライラ等）は「～する・だ」または「～する・が」が可（動詞からその他を派生）、V類（グラグラ等）は「～と・する・だ・が」が全て可であるという分類を示している。

viii 群, ix 群の代表例(東京)は順に「ク[ログ]ロと(黒々), モ[クモクと(黙々), み[ちみち(道々), [ナイナイに(内々), し[ま]じま(島々), プ[ツブツ(腫物), [ワ]ンワン(犬)」で, iii 群, vi 群は原則漢語, 他は原則和語である。語彙が多く, 対応に問題の無い i 群と v 群以外の群を中心に, 主に東京・京都方言から見た所属語彙, および対応が必ずしも明瞭ではないが分析の際に算入する参考語彙(それぞれ「所属, 参考」と略す)を以下に示す¹⁰。

調査項目 885 中, i 群(卜副)の所属 467, 参考 5。v 群(形動)の所属 142 である¹¹。

ii 群(卜副; 内部境界で連濁する傾向あり)は所属 43, 参考 8(各項目の括弧内は大体の意味, 半角カナは漢字の読みを表わす)。所属: アオアオと(青々), アカアカと(赤々), アキアキと(飽々), アリアリと(在々), イキイキと(生々), ウマウマと(旨々), オチオチと(落々), カルガルと(軽々), クラグラと(暗々), クログロと(黒々), コマゴマと(細々), コリゴリと(懲々), サエザエと(冴々), サムザムと(寒々), サメザメと(静寂), シミジミと(沁々), 洒々シァシァと, シラジラと(白々), シロジロと(白々), 清々セエイと, タカダカと(高々), ツクツクと(尽々), ナガナガと(長々), ナマナマと(生々), ナミナミと(並々), スケスケと(抜々), ノウノウと(暢々), ノビノビと(伸々), ノメノメと(厚顔), ハヤバヤと(早々), ハルバルと(遥々), ハレバレと(晴々), ヒエビエと(冷々), ヒロビロと(広々), フカブカと(深々), ホソボソと(細々), ホノボノと(仄々), ホレボレと(惚々), マザマザと(目撃), マジマジと(凝視), マルマルと(丸々), ヤスヤスと(易々), ユルユルと(緩々)。参考: イガイガと(毬々), ウスウスと(薄々), コワゴワと(怖々), サバサバと(捌々), シオシオと(萎々), シゲシゲと(繁々), スゴスゴと(悄々), ニギニギと(賑々)。

iii 群(卜副)は所属 35, 参考 3。所属: 藹々アアイと, 陰々インインと, 鬱々ウウウと, 営々エイエイと, 延々エンエンと, 閑々カカカと, 煌々コウコウと, 囂々ゴウゴウと, 昏々コンコンと, 燦々サツサツと, 啾々シュウシュウと, 肅々シュウシュウと, 深々シンシンと, 切々セツセツと, 錚々ソウソウと, 続々ゾクゾクと, 淡々タンタンと, 着々チャチャと, 転々テンテンと, 滔々トウトウと, 堂々ドウドウと, 訥々トツトツと, 飄々ヒョウヒョウと, 綿々メンメンと, 濛々モウモウと, 黙々モクモクと, 悶々モンモンと, 悠々ユウユウと, 楽々ラクラクと, 爛々ランランと, 隆々リュウリュウと, 凜々リンリンと, 累々レイレイと, 恋々レンレンと, 朗々ロウロウと。参考: ノウノウと(暢々), 茫々ボウボウと(草が), ボウボウと(火が)。

¹⁰ 本稿での語群の枠組や, 所属語彙の内容は, 今後の研究の進展があれば, それによって修正を受けるに違いないが, ひとまず分析する為の道具として, 主に東京・京都方言の量語の(参考語彙では他方言も), 第一にアクセント, 第二に品詞, 第三に和語・漢語の別を基準に, 分類・設定している(結果として, これだけでも音韻対応を確認することができた)。本稿の目標は, 様々な方言の状況を考慮に入れながら語群を精緻化することではない。語群の精緻化には, 類別語彙や系列別語彙がそうであるように, 原理的に長い年月をかける必要があり, もとより本稿の段階で達成できることではない。方言形や併用形や語用論の意味の問題など, 語群という仮説にとって難しい様々な問題が存在するにもかかわらず, 集計数値を見ると, 単純語や複合語と同様の音韻対応が 4 モーラ量語にも存在する, というのを「先ずは」示そう, というのが本稿の狙い・考え方である。また音韻対応が見られる以上は, そこから音変化の通時的解釈に進むことが可能である。

¹¹ 枚挙に暇がないため五十音図の各行から少数挙げる: i 群は「イライラと, カアカアと, サワサワと, タララと, ニコニコと, パラパラと, モヤモヤと, ユラユラと, リンリンと, ワンワンと」, v 群は「イボイボに, カサカサに, サラサラに, トロトロに, ネバネバに, バラバラに, モチモチに, ヨボヨボに, ラブラブに」など。「ユンユンと(電波が), ラブラブだ」等の「新しい」項目を若干含むが, それらは抽象的な語群に対して「比較」している。なおどれかの語群に属すると言にくい語彙は 62 あり, 原因としては「意味不明, 不使用」(後述)となる率が高いか, 地域ごとのまとまりはあっても全体の対応がずれているかである。

iv 群 (副詞, ト副) は所属 23, 参考 8。所属: いやいや (厭々), いろいろ (色々), うすうす (薄々), おさおさ (長々), 近々キキ, 散々サザン, 重々ジュウジュウ, 早々ウウウ, たびたび (度々), たまたま (偶々), ときどき (時々), なかなか (中々), なきなき (泣々), なくな (泣々), 日々ニチチ, のちのち (後々), まにまに (随に), みちみち (道々), もともと (元々), ゆくゆく (行々), よくよく (善々), よなよな (夜々), 碌々ロロ。参考: こわごわ (怖々), しぶしぶ (渋々), そうそう (然々), たかだか (高々), つらつら (熟々), つれづれ (徒然), ともども (共々), みすみす (見々)。

vi 群 (形動) は所属 14, 参考 3。所属: 暗々アンアンの, 往々ウウウに, 諤々ガクガクだ, 軽々ケイケイに, 歳々サイサイだ, じきじきに (直々), 綽々シヤクシヤクだ / と, 上々ジョウジョウに, とびとびに (飛々), 内々ナイナイに, 年々ネンネだ, ほどほどに (程々), 満々マンマンだ, 洋々／揚々ヨウヨウだ。参考: 散々サザンだ, 順々ジュンジュンだ, 別々ベツベツだ。

vii 群 (名詞, 形動, 副詞; 内部境界で連濁する傾向あり) は所属 52, 参考 13。所属: いえいえ (家々), 一々イチイチ, おのおの (各々), おりおり (折々), かたがた (方々), かねがね (予々), かがみがみ (神々), くちぐち (口々), くにぐに (国々), くれぐれも (呉々), こえこえ (声々), ことごと (事々), これこれ (此々), さきざき (先々), さまざま (様々), しかじか (然々), しなじな (品々), しまじま (島々), しもじも (下々), 重々ジュウジュウ, すえずえ (末々), すきずき (好々), すみずみ (隅々), それぞれ (其々), たえだえ (絶々), たかだか (高々), 段々ダンダン, ちかぢか (近々), つきづき (月々), つじつじ (辻々), つねづね (常々), つれづれ (徒然), てらでら (寺々), ときどき (時々), としどし (年々), ともども (共々), とりどり (彩々), なになに (何々), はしばし (端々), 半々ハルハル, ひとびと (人々), ひまひま (暇々), ふしぶし (節々), 坊々ボンボン, ますます (益々), まちまち (町々), まちまち (区々), みなみな (皆々), むらむら (村々), 銘々メイメイ, 面々メンメン, やまやま (山々)。参考: いろいろ (色々), おいおい (追々), こもごも (交々), 精々セセイ, そこそこ (其処其処), 代々ダイダイ, だれだれ (誰々), とんとん (均衡), 方々ホウホウ, まあまあ (一応), まえまえ (前々), まにまに (随に), われわれ (我々)。

viii 群 (名詞) は所属 17 (v 群から生産的に名詞を派生可能)。所属: いがいが (毬々), いやいや (嫌々), イライラ (苛々), うちうち (内々), カナカナ (蟬), ガラガラ (玩具), グリグリ (腫), げじげじ (虫), ゴロゴロ (雷), シャブシャブ (肉), 点々テンテン, なぞなぞ (謎々), ヒラヒラ (布), ブツブツ (腫), ボツボツ (腫), もろもろ (諸々), 歴々レイレイ。

ix 群 (名詞, 副詞, 感動) は所属 27, 参考 1 (i 群の擬音語から生産的に名詞を派生可能)。所属: かくかく (斯々), ケンケン (片足跳), 極々ゴクゴク, これこれ (感動), シイシイ (小便), しめしめ (感動), 少々ショウショウ, 精々セセイ, そうそう (然々), そもそも (抑々), 段々ダンダン, チュウチュウ (鼠), 蝶々チョウチョウ, チョンチョン (点々), ちんちん (陰茎), ついつい (不慮), どれどれ (感動), はいはい (這々), はいはい (感動), ポンポン (腹), まあまあ (一応), まあまあ (感動), ミンミン (蟬), もしもし (感動), やれやれ (感動), わざわざ (態々), ワンワン (犬)。参考: かずかず (数々; vii 群の可能性も)。

以上、総項目数 923 (多重所属 38) である。調査では項目ごとに短文を読み上げたあと「意味不明、不使用、方言と異なる」ものを指摘していただくが¹²、それらは原則として分析から除外する (但し、琉球では独自語彙の全てを共時的分析に、一部は通時的分析にも用いる)。また併用形はそれぞれ個別の項目と見て、集計の際には延べ数を出す。

3. 東京方言 (中輪式)、岡山市方言 (内輪式) —— 語彙と表現の境界を測る

東京 (旧市内)、東京都東村山市、岡山市 (南区妹尾)、広島県尾道市、広島市では下げ核 (弁別的) と句音調 (非弁別的) で音調型が決まる (系統は中輪式か内輪式)。尾道市までは東京と同じ句音調だが、広島市は有核語では 1 拍卓立、無核語は低平となる。岡山市からは形容動詞語尾が「だ」でなく「じゃ」となるが、アクセントには影響しない。下げ核が無ければ「0」、語頭から n モーラ目なら「n」、1, 3 モーラ目なら「13」で表わす。

岡山市 (南区妹尾) についてはこれまで高山 (2011a, 2011b, 2012a, 2012b, 2012c) で扱ってきた。岡山市の i 群の 1 単位形は「ピ[カ]ピカと」(i1 群) などとなり¹³、これを重ねて「ピ[カ]ピカピ[カ]ピカ…」(「26…」で表わす; i3 群) と言えるが、他方で光が点滅している場合は 2 単位形 (但し「単位」≠「単語」) で「[ピ]カ[ピ]カと」(i2 群)、延々と続く場合は「[ピ]カ[ピ]カ[ピ]カ[ピ]カ…」(「1357…」で表わす; i3 群) となる。i1 群が「語彙」寄りで i3 群が「表現」寄りであることはすぐに分かるが、i2 群の位置付けについては考察が必要である¹⁴。

岡山市の「[ピ]カ[ピ]カと」が語彙か表現かを考える為、高山 (2012b) で数量的に分析し、高山 (2012c) にその一部を引用した。その結果「13」は「動きや物事の繰り返しが含まれ、複数の動きや物事の切れ目が明瞭な場合」(i2 群) によく用いられ、逆に「繰り返しを積極的に含意しないか、切れ目が曖昧または存在しない場合」(i1 群) に「2」がよく用いられ、語幹を重ねて用いると「継続・繰り返しが必ず含意される」(i3 群) と分かった。i2 群、

¹² リスト読み上げ式の調査において、比較言語学的な観点から問題となる、方言間での語彙の意味の微妙な違いについてここで言及しておく。琉球では音形自体が本土とかなり異なるため、話者の回答は「音形または意味または両者が近いもの」を答えるもので、意味の違いについて曖昧なままになることは比較的少なかったと考えられる。他方で本土諸方言では、細かい発音こそ違えど、仮名で書くレベルの基本的な音形はよく似通っていて、それゆえ方言間での意味の微妙な違いが見過ごされた可能性がある。本来は、各語の意味について、東京との微妙な違いまで明らかにするのが望ましいが、調査に掛かる時間等も勘案し、語彙の意味の厳密な記述は断念して、形式本位で調査を進めた。これと同様のことは、畳語に関連して実施した文法調査についても言える。方言間での文法的・語用論的意味の微妙な違いについて、厳密に捉え切れているとは言いがたく、先行研究で言われているいくつかの形態論的な「型」にはめて分類して行ったというのが実情である。また、意味の記述としても、専門の研究者から見て大雑把な記述である可能性は免れず、ここでも形式本位となった。

¹³ これが常態であって、無声化により相補分布する東京とは異なる。また、「[ワン]ワンと」などとなる。

¹⁴ その前に、本稿の「語彙/表現」の区別について改めて説明する。この区別は、ラング (≒定着した社会習慣的なもの) とパロール (≒その場限りの個人的なもの) の区別とは必ずしも一致しない。例えば救急車のサイレンのドブラー効果を「ピーポー」の繰り返しで巧みに表現するのは個別的・一回的である。しかし定着した社会習慣であっても、有縁性の大きさから「表現」寄りに位置付けられる場合がある。両唇ふるえ音で「[プー!]」と発音し、2, 3 歳の幼児を「可愛がる、あやす、注意を引く」間投音が日本列島に分布する (青森市、盛岡市、東村山市、岡山市、高知県、甕島、沖永良部島の老年層男女計 14 名で確認)。この種の音声 (服部 (1984: 73), Alpher (1994: 163), 高山 (2011a, 2012a, 2013g)) は、たとえ局所的な弁別性があったとしても、感動詞やオノマトペにのみ分布する「周辺の音韻 (marginal phoneme)」であり、言語音とジェスチャーとの境界に位置する「口周りのジェスチャー (oral gesture)」である。現実の言語は多少なりと有縁性 (≒本稿の「表現」性) を含むが、言語の本質 (≒定義、典型) は恣意性 (≒本稿の「語彙」性) にある。

i3 群は有縁性が高く、「表現」寄りのため、通時論では「語彙」的な i1 群が中心となる¹⁵。

但し、後述の兵庫県南あわじ市阿万方言では「[ピ]カピカと」より寧ろ「[ピ]カ[ピ]カと」が i1 群の（数量的に）典型的な異音として現れるので、2 単位形だから i2 群であるとも限らない。京都（秋永（1980: 404-412）参照）と同様に ii 群が i 群に合流している阿万では、東京の「ア[カア]カと」を「[ア]カ[ア]カと、[ア]カアカと」と発音する。ところで ii 群の所属語彙を見ると、動きや物事として繰り返すことが可能な意味を持つ「2 モーラの要素」は 1 つも無く、これが i 群との意味的な違い¹⁶ となっている（高山 2012b）。従って南あわじ市阿万の「i3」は意味とは関係なく（=恣意的に）、「i3」という型で現れていると言える。

以下に東京、岡山市方言の体系と比較を示す。岡山市の話者は 1932, 1932, 1937 年生れ計 3 名延べ 5 名である。太枠は各品詞の最大度数、各語群の対応位置などの注目点を示す¹⁷。

表 1. 東京（辞典）、岡山市方言の 4 モーラ量語の体系と比較

		下げ核の有無と位置	13	1	2	3	0	4	計
東京・辞典	形動	(例:) ピ[カピカ]だ, 飛[び飛び]だ	0	4	11	15	185	1	216
	ト副	[ピ]カピカと, ク[ログ]ロと	0	433	35	67	38	1	574
	副詞	[つ]いつい, みちみち	0	17	17	6	37	1	78
	感動	[や]れやれ, [も]しもし	0	10	0	0	0	0	10
	名詞	し[ま]じま (島々)	0	18	35	15	26	6	100
		計	0	482	98	103	286	9	978
岡山市南区妹尾	形動	ピ[カピカ]じゃ, 飛[び飛び]じゃ	28	10	23	81	764	0	906
	ト副	ピ[カ]ピカと, ク[ログ]ロと	212	19	1980	353	6	0	2570
	副詞	[つ]いつい, みちみち	49	8	26	110	87	0	280
	感動	[や]れ[や]れ, [も]し[も]し	38	2	0	2	3	0	45
	名詞	し[ま]じま (島々)	10	47	10	191	100	0	358
		計	337	86	2039	737	960	0	4159

¹⁵ i2 群と i1 群の意味の違いについて、高山（2012b）より具体例を、本稿に合わせて加工した上で引用する。或る話者の内省報告によれば、「ひよこひよこ、ぴよこぴよこ、ふうふう、ぶうぶう、ぼくぼく、ぼこぼこ、ぼそぼそ、ぼたぼた、ぼちぼち、ぼちゃぼちゃ、ぼつぼつ、ぼつぼつ、ぼとぼと、ぼとぼと、ぼりぼり、ぼろぼろ」は（下げ核が）「i3」ならゆっくり、（下げ核が）「2」なら速く。「ぶうぶう、ふりふり、ぼりぼり、もじもじ」は「i3」ならゆっくり、「2」なら激しく。「ぶちぶち、ぼかぼか（と殴る）、ぼたぼた、みしみし」は「i3」ならゆっくり別々に、「2」なら速く続けて。「そろそろ（帰ろう）」は「i3」ならゆっくり、「2」ならもういい加減に。「ひりひり、ぴりぴり、ぼかぼか（する）」は「i3」ならじんわり、「2」なら強烈に。「びしびし・びしびし（叱る）」は「i3」なら柔かくじっくり、「2」なら沢山。「ぼそぼそ（した米）」は「i3」なら普通に、「2」なら余計にばらばら。「人によってまちまちだ」は「i3」なら指差すかのように個別に言及、「3」なら集団としてひっくるめて。「またまた出番だ」は「i3」なら叙情・口語的（例：[ま]た[ま]た雨じゃな一）、「3」なら叙事・文語的（例：またまた雨だ）。「ぼそぼそ暮らす」は「i3」なら余裕がある、「3」ならきゅうきゅうしている。

¹⁶ このような「アクセントと意味との関係」は、既の上野（2002）で、名詞において指摘されている。

¹⁷ 本節でのみ表の読み方を詳しく説明し、以降の節では要点だけ述べる。共時的体系を示す品詞別の表は参考用である。語群ごとの度数分布を表わす表は、最後に通時的考察をするための基礎として各節に示している。対応を解釈する上では、出現度数が偏って多くなっている部分（太枠で表示）を見ていく（これにより併用形や読み間違い等の問題を回避する）。より具体的な元データについては、調査項目と調査データが補説と共に、TULIP 電子版にのみ記載される。i 群は東京では原則「1」で、1 モーラ目が無声化する環境でのみ「2」となるが、岡山市では原則「2」で、表現性が高まると「i3」となる。ii 群は「3」となる。iii 群は東京では原則「0」で「3」も併用されるが、岡山市では「3」となる。iv 群は東京では「0」だが、岡山市では「3」も併用される。v 群は「0」、vi 群は「0, 3」が併用される。vii 群は東京では「2」、岡山市では「3」となる。viii 群は東京では「0, 4」が併用されるが、岡山市では「0」である。ix 群は東京では「1」だが、岡山市では「i3」も現れる。

語群		i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	余	計
東京・辞典	1	431	13	3	6	1	0	10	0	25	24	513
	2	32	3	0	6	0	1	49	2	0	9	102
	3	21	48	17	3	0	6	16	4	3	8	126
	0	5	3	34	29	141	16	19	13	4	34	298
	4	1	0	0	0	1	0	0	6	0	1	9
	計	490	67	54	44	143	23	94	25	32	76	1048
岡山市南区妹尾	13	211	1	1	8	4	0	16	0	53	55	349
	1	19	0	0	0	0	0	14	1	41	18	93
	2	1966	67	19	16	7	0	17	4	4	32	2132
	3	60	179	162	57	9	35	253	4	12	42	813
	0	2	3	4	73	635	48	23	66	13	104	971
	計	2258	250	186	154	655	83	323	75	123	251	4358

4. 尾道市方言（内輪式）、広島市方言（中輪式）——品詞の枠を越えた、世代間の音変化

広島県尾道市（土堂、久保）のii群は「2~1」（特殊拍を含むと「1」になる）、i2群は「13」、i3群は「26~15…」となる。話者は1919年生れ1名（「古」とする）、1936年生れ1名（「新」とする）である。広島市は『広島市方言アクセント辞典』に基づき、ii群は「2~1」（同上）、話者は1907、1913年生れ計2名延べ1名（「古」）、1926、1929、1943、1947年生れ計4名延べ1名（「新」）である。以下に各方言の体系と比較を示す。下表を見るとii群、iv群、vii群で品詞の枠を越えて、「古」の「3」が「新」の「2」に変化する傾向がある（iii群、vi群は殆ど影響無し）。「古」は、「4」の存在は東京に、vii群が「3」である点は岡山市に似ている。本稿全体の通時的比較は、尾道市・広島市ともに、合流前の「古」の状態を用いる。

表2. 尾道市、広島市方言（古、新）の4モーラ置語の体系と比較

		下げ核の有無と位置				13	1	2	3	0	4	計	
尾道市土堂・古	形動	ピ[カピカじゃ、飛[び飛びじゃ					2	2	5	24	150	1	184
	ト副	ピ[カ]ピカと、ク[ログ]ロと					10	73	361	68	1	0	513
	副詞	[つ]い[つ]い、みちみち					8	5	5	16	26	0	60
	感動	[や]れ[や]れ、[も]しもし					7	2	0	0	0	0	9
	名詞	し[まじ]ま（島々）					0	10	7	37	15	6	75
		計						27	92	378	145	192	7
尾道市久保・新	形動	ピ[カピカじゃ、飛[び飛びじゃ					2	7	6	10	161	0	186
	ト副	ピ[カ]ピカと、ク[ロ]グロと					37	120	349	27	5	0	538
	副詞	[つ]い[つ]い、みちみち					9	6	16	2	24	0	57
	感動	[や]れ[や]れ、[も]しもし					7	2	0	0	1	0	10
	名詞	し[ま]じま（島々）					0	11	22	17	19	4	73
		計						55	146	393	56	210	4
広島市・辞典古	形動	かさかさに、散り散りに					0	5	4	7	29	1	46
	ト副	ピ[カ]ピカ、ク[グ]グロと					0	20	116	21	3	0	160
	副詞	[しよ]うしよ、たまたま					0	4	9	7	8	1	29
	感動	[や]れやれ、[も]しもし					0	2	0	0	0	0	2
	名詞	ひと[び]と（人々）					0	5	2	7	5	0	19
		計						0	36	131	42	45	2

		下げ核の有無と位置	13	1	2	3	0	4	計
広島市・ 辞典新	形動	かさかさに, 散り散りに	0	1	7	4	27	1	40
	ト副	ピ[カ]ピカ, ク[ロ]グロと	0	20	131	3	0	0	154
	副詞	[しよ]うしよ, たまたま	0	4	9	3	8	1	25
	感動	[や]れやれ, [も]しもし	0	2	0	0	0	0	2
	名詞	ひ[と]びと (人々)	0	4	6	2	5	0	17
		計	0	31	153	12	40	2	238

語群		i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	余	計
尾道市 土堂・古	13	9	1	0	1	0	0	1	0	8	8	28
	1	72	1	2	1	0	0	5	0	11	4	96
	2	358	17	1	2	1	0	7	1	2	9	398
	3	13	33	33	7	3	9	46	1	5	10	160
	0	0	0	1	22	127	8	9	9	2	19	197
	4	0	0	0	0	0	0	1	6	0	0	7
	計	452	52	37	33	131	17	69	17	28	50	886
尾道市 久保・新	13	37	0	0	1	0	0	0	0	8	9	55
	1	119	3	4	1	2	0	8	1	11	10	159
	2	314	46	6	7	3	0	31	0	1	11	419
	3	2	1	26	1	0	6	12	0	6	3	57
	0	3	1	1	21	131	10	12	12	1	22	214
	4	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4
	計	475	51	37	31	136	16	63	17	27	55	908
広島市・ 辞典古	1	19	1	0	1	0	0	8	0	7	2	38
	2	110	17	1	5	1	0	5	1	1	4	145
	3	2	18	3	5	0	3	13	0	0	1	45
	0	2	2	1	7	24	1	3	4	0	3	47
	4	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2
	計	133	38	5	19	26	4	29	5	8	10	277
広島市・ 辞典新	1	19	1	0	1	0	0	3	0	7	2	33
	2	112	31	2	5	1	0	14	0	1	4	170
	3	0	1	2	1	0	3	4	0	0	1	12
	0	0	0	0	8	24	1	1	4	0	2	40
	4	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2
	計	131	33	4	16	26	4	22	4	8	9	257

5. 東村山市方言（中輪式）——語幹末核の有無による語用論的意味の区別

東京都東村山市の i1 群は「1~2」（1 モーラ目が無声化すると「2」）、i2 群ナシ（「13」は存在するが数量的に極僅か）、i3 群は「[ピ]カピカ[ピ]カピカ…」（「15…」、無声化時は「26…」）となる。話者は 1935, 1938, 1938, 1938, 1938, 1923 年生れ計 6 名延べ 6 名（農家の男性；秋津町、恩多町、久米川町、野口町、廻田町 2 名）である。以下に体系と比較を示す。東京（旧市内）と大きく異なる点は、「4」が大量に現れる点である。特に v 群、vi 群の形容動詞と、viii 群の派生名詞に集中的に現れている。この点に関連して高山（2012d, 2012e, 2013a, 2013b, 2013h）では詳細に語用論的意味を区別する音調について論じたが、以下では本稿の議論に繋がる要点だけを取り出して述べる（枠組の問題については TULiP 電子版に補説を記す）。

表 3. 東村山市方言の 4 モーラ畳語の体系と比較

		下げ核の有無と位置						13	1	2	3	0	4	計
東京都東村山市	形動	ピ[カピカ]だ, 飛[び飛び]だ						4	58	41	46	371	530	1050
	ト副	[ピ]カピカと, ク[ログ]口と						20	2319	152	256	177	3	2927
	副詞	[つ]いつい, み[ちみち]						11	64	35	40	170	3	323
	感動	[や]れやれ, [も]しもし						7	42	0	1	10	0	60
	名詞	[しま]じま (島々)						0	93	149	58	77	59	436
		計						42	2576	377	401	805	595	4796

語群		i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	余	計
東京都東村山市	13	20	0	0	0	0	0	1	0	9	13	43
	1	2309	49	23	16	31	2	44	5	115	94	2688
	2	152	2	0	5	1	0	192	8	1	24	385
	3	71	219	25	25	6	12	70	4	24	30	486
	0	35	10	150	128	253	70	67	27	11	91	842
	4	3	1	0	1	478	10	4	54	0	46	597
計		2590	281	198	175	769	94	378	98	160	298	5041

形容動詞 (v 群, vi 群: ピカピカだ, 別々だ) において語幹末核 (v2 群: ピ[カピカ]だ) と無核 (v1 群: ピ[カピカだ]) の形が併用されている¹⁸。高山 (2012d) では 1936 年生れの多摩湖町の話者を加えた計 7 名ほか数名を対象に文法調査を実施し, 原則として全員の一致を見た。語幹末核の有無は全活用形に及ぶ¹⁹。「4/0」は「個別感覚/共有感覚」²⁰ (文末・文中) または「予想外/法則通り」²¹ (恐らく文中のみ) を表わし, 終助詞「よ/よね」の区別に近い (滝浦 2007, 福島ほか 2006, 三宅ほか 2012)。「4」が話し手の感情・感覚を表わす点に注目すれば, 工藤 (2007) の, 愛媛県宇和島方言の形容詞における「表出 (テンス分化がなく, 発話時の話し手の感情, 感覚, 評価を表出する) / 叙述 (テンス分化があり, 客体的側面を前面化する)」の区別にも似ているが, やはりこの場合, 終助詞の表わす意味の方が近い。なお, 文中の形式が存在しない終助詞や形容詞の表出形とは異なり, 「4/0」は文中でも区別され, またそれゆえ「文末のイントネーション」とは分析できない。

¹⁸ 4 モーラ畳語でない形容動詞や名詞では, たとえ偶然「4,0」が併用されていても問題の意味の区別は存在せず, また和語でなく漢語であっても 4 モーラ畳語であれば問題の形態の区別が存在することを確認した。

¹⁹ ピ[カピカ]だ(ん)べ, ピ[カピカだ(ん)べ, ピ[カピカ]だった, ピ[カピカ]だった, ピ[カピカ]でさ, ピ[カピカ]でさ, ピ[カピカ]に (なる), ピ[カピカに (なる), ピ[カピカ]だ, ピ[カピカ]だ, ピ[カピカ]の (車), ピ[カピカ]の (車), ピ[カピカ]だら (良い), ピ[カピカ]だら (良い)。但し「だ(ん)べ, だら」は東京の「だろう, なら」に相当する。

²⁰ 「個別感覚」は典型的には「孤立」を表わすが, 単に共有を意図しない場合にも用いられる。「共有感覚」は典型的には「現物」の存在を表わすが, たとえ現物が現場に無くとも「感覚の共有」(周囲に自分の感覚が理解されること)を意図して用いうる。例えば, 暑いなか外で共同作業をしていて早くも喉が滯ってきたが, 皆の手前言い出せなくてボソッと小声で呟く時は, 「喉がカ[ラカラ]だ」となる(「孤立」)。他方で, 作業が一旦は終了し皆で休憩を取ろうという時に, 周囲にアピールする時は, 「喉がカ[ラカラ]だ」となる(自らの喉という「現物」が他者から見えないが, それでも共有が意図されている)。

²¹ 「個別感覚/共有感覚」はそれぞれ「予想外/法則通り」と分析できる場合もある。久米川町と多摩湖町の話者 2 名では形容動詞から生産的に派生する名詞にも問題の形態の区別を確認した (他の 5 名の生産的な派生名詞は「4」のみで, 意味の区別も中和するが, 形容動詞に関しては 7+α 名一致)。この 2 名では, 例えば「モヤモヤが (出る)」は「0」なら「自然と, 法則通りに」, 「4」なら「突如として, 予想外に」, 山に霧が出る様子を表わす。この区別は形容動詞語幹に「の」が付く場合にも見られる (後述)。

久米川町の話者に物語文²² とそれに終助詞等を付けた版を交互に計 12 回読み上げていただき、26 か所（下線部）の 4 モーラ畳語の話幹末核の有無を数えた。結果、「だ、じゃ」が続く形は「4」91%、「の」が続く形は「0」88%で、それぞれの（物語文を読み上げる際の）無標形が判明した²³。ところが下線部（10）では旧常識を示す文脈であるためか（過去の共有感覚）、ここだけ「0」（有標形）が 42%で、（18）では我が目を疑う文脈であるためか（予想外・孤立）、ここだけ「4」（有標形）が 58%だった。結果に無標形が半分混じるため明瞭な使い分けでないが²⁴、アクセント調査、複数人数調査、内省調査²⁵ と併せて総合的に判断する²⁶。

6. 青森市、盛岡市方言（以上外輪式）——核の位置を決める前部（＝後部）要素

青森市、岩手県盛岡市では昇り核と²⁷、有核語の「言い切り形／接続形」の区別²⁸ によって音調型が決まる。下げ核と同様に「0, n」等の記号を定める。青森市で核が 1, 3 または 2, 4 モーラ目にあることを「13, 24」で表わすと、核によるダウンステップ（Igarashi (2006), 高山・中澤・大槻 (2012a, 2012b)）による小さな下降を「!」で表わせれば「13」は「[はい!]はい。[ただ!ただ…」などとなり、核による低平化（高山・中澤・大槻 2012a）により後部要素の上昇

²² 物語文は次のようなもの（「終助詞等を多く付けること」による影響は見られなかったため、終助詞等の少ない方の版のみを右に示す）：『太郎と花子の双子の兄妹のことは皆よく知っていた。太郎と花子の家には二台の自転車があった。ピカピカの自転車とボロボロの自転車だった。一台目は十年使ってボロボロになった。ボロボロの一台目は十年使った。二台目は買ったばかりでピカピカのままだった。ピカピカの二台目は買ったばかりだった。太郎はいつもピカピカの自転車に乗っていた。太郎がいつも乗っている自転車はピカピカだった。花子はいつもボロボロの自転車に乗っていた。花子がいつも乗っている自転車は(10)ボロボロだった。その日はクラスの皆で遊ぶために公園に来ていた。太郎と花子がもうすぐ公園にやってくるころだった。太郎と花子がやってくる道を皆で眺めていた。遠くに小さく花子がやってくるのが見えた。「あれ？花子がピカピカの自転車に乗ってきたぞ？」「ピカピカじゃなくて ボロボロの自転車のはずだろ？」「ボロボロじゃなくて ピカピカの自転車だよ。」「あの自転車はピカピカだよ。ボロボロじゃない。」続いて後ろから太郎がやってくるのが見えた。「あれ？太郎も(18)ピカピカの自転車に乗ってきたぞ？」「ボロボロじゃなくて ピカピカの自転車に？」「ピカピカじゃなくて ボロボロの自転車のはずだろ。」「あの自転車はボロボロじゃない。ピカピカだよ。」二人が公園に着いたので自転車のことを聞いた。なんでも同じ自転車をもう一台買ったそうだ。ボロボロの自転車は前の日に処分したらいい。二台のピカピカの自転車には名前が書かれていた。』

²³ 短文を次々に読み上げるアクセント調査では「だ」が続く形で「4」65%（478÷731）であり、また自然談話でも数値が異なることが予想される。あくまで、物語文読み上げ調査に限定される。

²⁴ このような不明瞭な使い分け、即ち、或る文脈で有標形が出現し易いという傾向はあっても、どちらか一方だけが出現する環境を用意できない使い分けは、既に「語用論的意味の区別」という形で知られている。

²⁵ 久米川町の話者による内省を示す（詳細は高山 (2012d) 参照）。「ギラギラが目に入る」は、「0 は暑さの強さを伝える」。「ゴロゴロが鳴る」は、「ガは上げた方が強い。雷そのものを指しているような」。「ダクダクだ」は、「0 は凄い汗をかいていて周りの人にもその様子を伝える。4 は普通の話のアレ」。「クタクタだ」は、「0 は自分が疲れていることを相手が感知している。4 はただ話す」。「グニャグニャだ」は、「0 は相手がどう感じているかを含意。相手にも柔かさ・ぐにゃぐにゃさが分かるように。実際に物を見て曲がっている様子を相手を感じる。曲げているのを見ている感じ。4 は相手がどう感じているかを必ずしも言っていない」。「モヤモヤが出る」は、「意味は例えば、山の霧。0 は空を見ていると曇ってきて風が出てきてそれから霧が出るという自然の法則に則った感じ。4 は急に何の前触れも無く出てきたというのが分かるという感じで、例えば妖怪の仕業なら 4 になる」。「顔にポツポツがある」は、「0 は孫とか相手に触ってもらいながら。ぼつぼつが目に見えて分かるような感じ」。なおこれらは小野編 (2007) を用いて語幹の意味が偏らないよう選んだ 98 項目中、内省の得られた一部を挙げたが、全項目で「0, 4」両音形を得ている。

²⁶ 表 3 の viii 群を踏まえて表 1, 表 2 を見ると、東京、尾道市における名詞「0, 4」は東村山市に類似した状態の痕跡と解釈できる。また青森市・盛岡市では、東村山市に類似した形態の区別が見られる（後述）。

²⁷ 青森市・盛岡市共に、有核語では核の位置で強く上昇し、無核語では文節末で弱く上昇するが、盛岡市では接続の環境で無核語が低平になることもある。

²⁸ 後に続く接続形（「…」で表わす）では音調句末の下降が現れず、言い切り形（「。」で表わす）では現れるが、言い切り形は青森市では最終音節のみ低くなり、盛岡市では 1 拍卓立となる。

が抑えられた「24」は「い[や]いや。」などとなる²⁹ ³⁰。盛岡市の「13」は「[や]れ[や]れ。」などとなる。なおセグメントは東京と同様に表記する³¹。

青森市では i1 群は裸では「[ピカピ]カ。」となるが、「と」が付くと一部語幹で「[トクトクと… (擬音語), トクトク[と (擬態語) (～注ぐ)]」などと「1/0」で使い分け, i2 群ナシ(「13」([ピカ!ピカ…])は動きを殊更に表現する為に用いるが, 数量的に極僅か), i3 群は「[ピカピカ!ピカピカ! (中略) [ピカピ]カ。」(「15…」)となる。盛岡市では i1 群は裸では「1」だが, 「と」が付くと「1/0, 4」(程度強調 (擬音語も含む) /無標)で使い分け, i2 群ナシ, i3 群は「15…」か「00…」となる。青森市で「と」が付く形は数量的な分析から除外したが³², 盛岡市では場合分けして下表にデータを示す。青森市の話者は1987年生れ(石江;市役所西の農村), 四十代後半(松森;市役所東の市街), 1991年生れ(桜川;松森の西隣;個別の点に関する補強のデータとした)の3名である。盛岡市は『岩手方言アクセント辞典』³³の, 明治末期頃に生れた少なくとも計3名延べ1名のデータと, 1929年生れ(八幡町)の話者の調査データ³⁴に基づく。以下に各方言の体系と比較を示す。

表 4. 青森市, 盛岡市方言の 4 モーラ畳語の体系と比較

		昇り核の有無と位置	13	1	2	3	0	4	計
青森市 石江	形動	ピカピカ[だ。飛び飛び]だ。	0	4	2	8	175	0	189
	ト副	[ピカピカ]と。クロ[グロ]と。	0	433	4	51	35	0	523
	副詞	[ついつい。みちみ]ち。	3	6	8	10	30	0	57
	感動	[やれ!や]れ。[もしも]し。	1	1	0	0	0	0	2
	名詞	し[な]じな。(品々)	0	15	21	14	20	6	76
		計	4	459	35	83	260	6	847
青森市 松森	形動	ピカピカ[だ。飛び飛び]だ。	1	1	2	11	163	3	181
	ト副	[ピカピカ]と。クロ[グロ]と。	4	397	6	34	36	0	477
	副詞	[ついつい。みちみ]ち。	5	7	7	13	26	0	58
	感動	[やれ!や]れ。[もしも]し。	8	0	0	0	0	0	8
	名詞	し[な]じな。(品々)	0	10	15	28	14	4	71
		計	18	415	30	86	239	7	795

²⁹ 感動詞「いやいや」は各地で「0, 2, 24」が多く見られ, 対応の観点からこのデータに問題はないが, 少数のため数量的な分析から除外する。

³⁰ 無核語による高平化(高山・中澤・大槻 2012a)というのものもあるが本稿には関与しない。なお上野善道(p.c.)によれば, 青森市と発生条件は異なるが岩手県雫石町でもダウンステップ, 高平化に当たる現象が存在する。

³¹ 方言的なセグメントとして前鼻音付きの濁音や, 語中で有声化する清音や, イ, シ, チ, ジが順にエ, ス, ツ, ズと合流する現象等が存在する。なお東村山市ではイとエが合流直前で, 1名のみ前鼻音が見られた。

³² 青森市では i 群で「と」が付くと石江では「0」が20例, 松森では373例, 桜川では2例出現した(既述の擬音語/擬態語の使い分け)。東村山市でも i 群で「と」が付くと野口町では「4」が10例, 恩多町では「0」が44例出現し(これらは数量的分析から除外した), 「と」が付かなくても「0」が話者総計35例出現している(この原因は不明)。i 群で「と」を付けると現れる「0, 4」は, 東村山市以北に現れる特徴である。

³³ なお, 『岩手方言アクセント辞典』p.616は「ピカピカ[ずー]」のような形における「ずー」が東京の「する」に対応すると述べているが, 八幡町の話者の著書(中谷 2011: 31)に「形容詞」とあり, 同話者に打消の形を選んでいただくと「ピカピカ[ず]く[ね]」(形容詞)であって「*ピカピカざね」(動詞)は不可能という回答だった。「華々しい」等の「しい」に対応する要素と考えられたため, 本稿の分析から除外した。

³⁴ 八幡町の形容動詞「4」が特殊拍の影響で「3」にずれる場合は「4」として数えた。表において, i 群は平均・四捨五入した値で合計に算入したが, ii, iii 群はそのまま算入した。i, ii, iii 群は t a, b, c をデータとするので, 他の群に比べて3倍のデータ量となっている。

		昇り核の有無と位置	13	1	2	3	0	4	計
盛岡市・辞典	形動	ピカピ[カ]に。飛び飛[び]に。	0	7	8	12	22	53	102
	ト副	ピカピカと。クログ[ロ]と。	0	175	13	3	162	48	401
	副詞	[しよ]うしよう。みちみち。	0	6	10	10	21	2	49
	感動	[や]れやれ。[も]しもし。	1	3	0	0	1	0	5
	名詞	し[な]じな。(品々)	0	6	17	14	11	5	53
		計	1	197	48	39	217	108	610
盛岡市八幡町	形動	ピカピ[カ]だ。飛び飛[び]だ。	1	2	9	11	37	152	212
	ト副	ト a, b, c の合計値	0	798	37	0	330	394	1559
	ト a	ピカピ[カ]と V。シ[ラ]ジラと V。	0	190	13	0	136	182	521
	ト b	[ピ]カピカ V。シ[ラ]ジラ V。	0	385	12	0	86	36	519
	ト c	ピカピ[カ]と。シ[ラ]ジラと。	0	223	12	0	108	176	519
	副詞	[つ]いつい。みちみち…	3	14	12	7	27	2	65
	感動	[や]れ[や]れ。[も]しもし。	4	7	0	0	0	0	11
	名詞	し[な]じな。(品々)	0	18	26	14	3	17	78
		計 (ト副は平均・四捨五入値算入)	8	307	59	32	177	302	885

語群		i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	余	計
青森市石江	13	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	4
	1	433	8	2	1	1	0	5	1	16	10	477
	2	1	4	0	2	0	0	24	0	1	6	38
	3	9	39	13	4	1	0	24	1	4	3	98
	0	7	2	30	23	136	14	16	11	3	29	271
	4	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	6
	計	450	53	45	30	138	14	69	19	25	51	894
青森市松森	13	4	0	0	0	0	0	0	0	7	7	18
	1	397	5	2	3	0	0	5	0	12	8	432
	2	4	2	0	3	0	0	20	0	0	4	33
	3	9	32	1	5	0	2	39	1	3	4	96
	0	9	4	29	22	130	11	9	9	1	26	250
	4	0	0	0	0	3	0	0	4	0	0	7
	計	423	43	32	33	133	13	73	14	23	49	836
盛岡市・辞典	13	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	1	175	2	0	0	5	0	3	0	9	7	201
	2	13	1	0	4	3	0	24	0	1	6	52
	3	2	2	0	6	5	3	22	0	1	3	44
	0	145	15	11	16	11	7	12	4	2	8	231
	4	24	29	1	3	49	1	3	3	0	3	116
	計	359	49	12	29	73	11	64	7	14	27	645

語群		i	ia	ib	ic	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	余	計
盛岡市八幡町	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	8
	1	787	189	378	220	13	13	4	1	0	9	1	20	17	340
	2	10	4	3	3	30	0	3	2	0	33	3	0	8	82
	3	0	0	0	0	0	0	3	1	1	12	0	5	7	29
	0	236	105	52	79	36	91	25	16	14	7	2	0	13	283
	4	339	160	24	155	71	8	6	134	3	8	11	0	24	378
	計	1372	458	457	457	150	112	41	154	18	69	17	29	73	1120

v 群の「0,4」は青森市石江・松森, 盛岡市八幡町では使い分ける(高山・中澤・大槻 2012b: 163-164; 桜川は「0」に合流済み)。青森市・盛岡市の「0/4」(v1 群/ v2 群)は工藤(2007)「叙述/表出」の区別に近い。盛岡市の「0/4」は単純な「叙述/表出」と考えられる。他方で青森市については, 大槻知世の文法調査(石江・松森)によれば, 「4」は文末において「訴え」の型で, 話し手が情動的に(マイナスまたはプラスの感情の表出; マイナスが典型的), 「不意に感じた驚き」を聞き手に訴えかける為に用いる。文中でも「0,4」は区別するが, 「4」の「聞き手への訴えかけ」の要素が消え, 「話し手が不意に感じた驚きの表出」のみとなる。vi 群の漢語では文末でも「0」が普通だが「4」も不可能ではない。viii 群の名詞に「0,4」の2種あるが, 形容動詞から生産的に派生するのは「4」だけで, 問題の意味の区別は中和する。以下に大槻知世の内省と調査による文例を示す。文末で言い切る形に付した文脈は, 対応する連体修飾の形にもそのまま適用されるが, 「聞き手への訴えかけ」の有無が異なる。

表 5. 青森市石江, 松森方言のオノマトベの形容動詞の「訴えの型」の文例

1a1	無標「0」キラキラ[だ]。[宝飾店(光り輝くものがあるのが当然の場所)でショーケースの中の貴金属を見て]
1b1	訴え「4」キラキ[ラ]だ。(プラスの感情)[何の期待もせず開けてみた引き出しの中に宝石があるのを見つけて](※同じ音形で, 名詞という解釈も可)
2a1	無標「0」ポカポカ[だ]。[非常に寒い日に外から戻り, こたつに入って]
2b1	訴え「4」ポカポ[カ]だ。(プラスの感情)[寒い日に外から帰って, まだ電源が入っていないはずのこたつに入ったところ, 家人が既に電源を入れていたのかこたつが温かくて]
3a1	無標「0」ピカピカ[だ]。[父親の新品の時計を見て]
3b1	訴え「4」ピカピ[カ]だ。(マイナスの感情)[成金趣味のような派手な時計を目にして]
4a1	無標「0」グニャグニャ[だ]。[縦書きでノートをとっている時に, 真っ直ぐにならず左右に蛇行してしまっ]
4b1	訴え「4」グニャグ[ニャ]だ。(マイナスの感情)[縦書でお礼状を書くとき(真っ直ぐ書くことが期待される状況)に, 真っ直ぐにならず左右にブレてしまったのを見て]
5a1	無標「0」ベツベツ[だ]。(※漢語の場合)
5b1	訴え「4」ベツベ[ツ]だ[っ]てば。(マイナスの感情)[何度言っても分かってくれない相手に「もういい加減分かってくれよ」という気持ちで]
1ab2	無標「0」キラキラ[だ]ホーセキ[だ]。/ 驚き「4」キラキ[ラ]だ]ホーセキ[だ]。
2ab2	無標「0」ポカポカ[だ]コタツ[だ]。/ 驚き「4」ポカポ[カ]だ]コタツ[だ]。
3ab2	無標「0」ピカピカ[だ]トケー[だ]。/ 驚き「4」ピカピ[カ]だ]トケー[だ]。
4a2	無標「0」グニャグニャ[だ]モジ[だ]。(※連体形は「~の」も可)
4b2	驚き「4」グニャグ[ニャだ!モジ]だ。(※ダウンステップが発生)

vii 群(「島々」等の語で, 複合語に近い)では, 前部(=後部)要素が単語にもなる場合は, その核の有無と位置によって全体の核の位置が決まる傾向がある(下表の太枠)。下表で青森市石江を見ると, 畳語が「3」の場合に例外が3例あるが, 「形動・副詞」の例で, 「名詞」に限れば例外は無い。青森市松森は「2,3」を併用する語が11例, 盛岡市の辞典は6例あり, 「3」への合流が進んでいる。八幡町の話者は, 前部要素が「0,2」なら畳語は「2」, 「1」なら「3,1」になるという明確な傾向を持ち, 恐らくこの種の分布の古態と見られる。

表 6. 青森市、盛岡市方言の vii 群 (名詞・形動・副詞) とその前部 (=後部) 要素の核

前部 (=後部) 要素が単語にもなる畳語の核		1	2	3	0	4	計
青・石江	要素が「0」である畳語の数 (和語+漢語)	0+0	7+0	4+1	0+0	0+0	11+1
	要素が「1」である畳語の数 (和語+漢語)	1+2	0+0	6+4	2+2	0+0	9+8
	要素が「2」である畳語の数 (和語+漢語)	1+0	13+0	2+1	1+0	0+0	17+1
	計	2+2	20+0	12+6	3+2	0+0	37+10
青・松森	要素が「0」である畳語の数 (和語+漢語)	0+0	5+0	6+1	1+1	0+0	12+2
	要素が「1」である畳語の数 (和語+漢語)	1+2	0+0	5+3	2+0	0+0	8+5
	要素が「2」である畳語の数 (和語+漢語)	1+0	9+0	14+1	2+0	0+0	26+1
	計	2+2	14+0	25+5	5+1	0+0	46+8
盛岡辞典	要素が「0」である畳語の数 (和語+漢語)	0+0	8+0	2+0	5+0	0+0	15+0
	要素が「1」である畳語の数 (和語+漢語)	0+1	2+0	7+2	1+1	0+0	10+4
	要素が「2」である畳語の数 (和語+漢語)	0+0	6+1	6+0	2+0	0+0	14+1
	計	0+1	16+1	15+2	8+1	0+0	39+5
盛岡八幡	要素が「0」である畳語の数 (和語+漢語)	1+0	12+0	0+0	0+0	2+0	15+0
	要素が「1」である畳語の数 (和語+漢語)	4+2	1+0	5+5	1+0	1+0	12+7
	要素が「2」である畳語の数 (和語+漢語)	0+0	10+1	1+0	2+0	2+0	15+1
	計	5+2	23+1	6+5	3+0	5+0	42+8

7. 京都、神戸市、南あわじ市、徳島市、高知市方言 (以上中央式) ——式の対立

京都、兵庫県神戸市、南あわじ市、徳島市、高知市では、下げ核と声調 (高く始まり自然下降しながらも平らに進む「高起式」と、低く始まりやがて上昇する「低起式」) が弁別的である。高起式、低起式を「a, b」で表わす。低起式で無核の際の上昇位置は、高知市は 2 拍目、徳島市は 3 拍目、その他は最終拍である。2 単位形は本来「a1.a1, b2.b2」だが「13, 24」で代用する³⁵。語末核は高知市以外では拍内下降を有し、例えば「つ[ね] (常 b2)」などとなる³⁶。形容動詞語尾「だ」の方言形「や (, じゃ)」は 5 方言とも「低接」で³⁷、例えば京都では「ピカピカ[に, ピカピカ]や」(総合的には b0) となる。下表で、京都方言は『日国』に基づく。神戸市は 1971 年生れの、徳島市は 1937 年生れの、高知市は 1946 年生れの話者各 1 名に関する辞典 (中井ほか編 1997, 1999, 2001) のデータに、南あわじ市阿万は 1933 年生れの話者 1 名に対する中澤光平の調査に基づく。南あわじ市で i1 群は「13」を基本に「a1」まで揺れ、2 つ目のピッチの山を少し抑えた発音も現れる (「と」の有無は任意)。i2 群は存在せず、i3 群は「([ピカ]ピカと,) [ピカ]ピカ[ピカ]と, [ピカ]ピカ[ピカ]ピカと, … (〜光る)」(「135 …」) のように、後に動詞が続く際は必ず「と」が付く³⁸。以下に体系と比較を示す。

高知市では i 群と ii 群の対立が明瞭だが、京都、神戸市、南あわじ市、徳島市では i 群に合

³⁵ 「24」は南あわじ市の「わ[れ]わ[れ]」, 向[き]向[き]」2 例 (b2 との併用形で、我 b0, 向き b2) のみで、岡山市の名詞の「13」(高山 2012b) と同様に一種の強調形と見られるが、数量的な分析からは除外する。

³⁶ 但し「a4」0 例, 「b4」は京都「いろい[ろ]」1 例のため, 「a4, b4」は数量的な分析から除外する。

³⁷ 助詞・助動詞や文末の要素が低く付くことを一般に「低接」、高く付くことを本稿では「高接」と呼び、語が有する固有のアクセントとは切り離して考える。なお後述の土佐市の「ちゃ」は音韻的に破擦音。

³⁸ 「と」が付く「13」は i3 群とも解釈できるが、「と」の無い「13」は i1 群としか解釈できず、数量的にも i1 群は「13~a1」である。i3 群に「15…」は存在しない。「単位」を繰り返す回数はその動作の回数を動機づけず、単に時間の長さを表わす。i 群には他に強調形「ク[ラー]クラ, グ[ルー]グル, ゴ[チャー]ゴチャ, ヒョ[ロー]ヒョロ」(非弁別的な引き音を挟む b2) が存在するが、数量的な分析からは除外する。

流直前か合流済みである。京都では ix 群に「b3」が現れるが、次節の高知県の各市町でも同様で、中央式の特徴と見られる。iv 群, vii 群, viii 群は群の内部で「a/b」が分かれている。

表 7. 京都, 神戸市, 南あわじ市, 徳島市, 高知市方言の 4 モーラ置語の体系と比較

		式と下げ核	13	a1	a2	a3	b2	b3	a0	b0	計
京都・辞典	形動	ピカピ[カ]や, [サンザン]や	0	4	2	0	11	5	33	97	152
	ト副	[ピ]カピカと, [ホ]ソボソと	5	380	0	1	1	1	37	5	430
	副詞	[つ]い[つ]い, [たまたま	3	9	4	0	14	1	20	11	62
	感動	[や]れ[や]れ, さ[て]さて	2	4	0	0	1	0	0	0	7
	名詞	つきづき(月々)	0	1	19	0	14	9	12	11	66
		計	10	398	25	1	41	16	102	124	717
神戸市・辞典	形動	ピカピ[カ]や, [サンザン]や	2	3	0	0	2	3	2	15	27
	ト副	[ピ]カピカと, [ホ]ソボソと	41	41	0	0	3	2	1	0	88
	副詞	[つ]い[つ]い, [たまたま	3	4	0	0	3	4	7	4	25
	感動	[や]れ[や]れ	1	1	0	0	0	0	0	0	2
	名詞	つきづき(月々)	0	2	0	0	3	2	4	4	15
		計	47	51	0	0	11	11	14	23	157
南あわじ市阿万	形動	ピカピ[カ]や, [サンザン]や	4	1	2	2	9	1	25	137	181
	ト副	[ピ]カ[ピ]カと, [ホ]ソボソと	384	165	1	2	3	0	39	1	595
	副詞	[つ]い[つ]い, [たまたま	9	4	3	2	17	1	26	2	64
	感動	[や]れ[や]れ, さ[て]さて	7	0	0	0	3	0	0	0	10
	名詞	つきづき(月々)	2	6	26	1	15	3	15	8	76
		計	406	176	32	7	47	5	105	148	926
徳島市・辞典	形動	ピカ[ピ]カや, [サンザン]や	2	2	0	2	6	2	1	13	28
	ト副	[ピ]カピカと, [ホ]ソボソと	43	43	1	0	2	0	2	0	91
	副詞	[つ]い[つ]い, [たまたま	3	2	0	3	6	0	5	1	20
	感動	[や]れ[や]れ	1	1	0	0	0	0	0	0	2
	名詞	つきづき(月々)	0	1	1	3	3	0	5	2	15
		計	49	49	2	8	17	2	13	16	156
高知市・辞典	形動	ピカピカや, [サンザン]や	2	2	1	2	4	2	1	14	28
	ト副	[ピ]カピカと, [ホ]ソボソと	38	39	5	3	0	1	3	0	89
	副詞	[つ]い[つ]い, [たまたま	4	4	5	4	2	1	4	1	25
	感動	[や]れ[や]れ	1	1	0	0	0	0	0	0	2
	名詞	つきづき(月々)	0	1	4	4	0	2	4	2	17
		計	45	47	15	13	6	6	12	17	161

語群		i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	余	計
京都・辞典	13	5	0	0	1	0	0	0	0	4	0	10
	a1	351	44	2	3	2	0	1	0	8	8	419
	a2	0	0	0	1	0	0	21	0	0	4	26
	a3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	b2	1	0	0	1	1	0	27	0	2	9	41
	b3	1	0	0	0	2	0	6	0	7	1	17
	a0	6	1	33	18	8	16	8	9	4	9	112
	b0	4	2	0	11	92	3	6	5	0	4	127
	計	369	47	35	35	105	19	69	14	25	35	753

語群	i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	余	計	
神戸市・辞典	13	38	3	0	0	0	0	0	4	2	47	
	a1	38	3	0	1	0	0	1	7	2	52	
	a2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	a3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	b2	0	3	0	0	0	0	7	0	1	11	
	b3	1	2	0	1	1	0	5	0	2	14	
	a0	0	0	1	7	0	2	1	3	1	15	
	b0	0	0	0	2	13	0	4	2	1	24	
	計	77	11	1	11	14	2	18	5	15	9	163
	南あわじ市阿万	13	369	26	2	4	0	0	2	12	12	428
a1		143	23	5	1	0	0	2	7	3	185	
a2		1	1	0	3	0	0	30	0	1	36	
a3		1	1	0	1	0	1	1	0	1	7	
b2		2	3	0	3	2	1	26	0	2	54	
b3		0	0	0	0	0	0	3	0	2	5	
a0		10	5	32	24	0	16	7	9	4	120	
b0		1	0	0	2	133	1	2	6	0	149	
計		527	59	39	38	135	19	73	17	28	49	984
徳島市・辞典		13	38	5	0	1	0	0	0	4	2	50
	a1	39	5	0	0	0	0	0	4	2	50	
	a2	0	1	0	0	0	0	1	0	0	2	
	a3	0	0	0	2	0	1	3	0	1	8	
	b2	0	2	0	2	1	0	10	0	2	17	
	b3	0	0	0	0	1	0	2	0	0	3	
	a0	1	0	1	4	0	1	0	5	1	13	
	b0	0	0	0	0	13	0	2	0	2	18	
	計	78	13	1	9	15	2	18	5	12	8	161
	高知市・辞典	13	38	0	0	1	0	0	1	5	2	47
a1		38	1	0	1	0	0	1	6	2	49	
a2		0	5	0	2	0	0	6	0	1	15	
a3		0	3	0	2	0	1	4	0	2	13	
b2		0	0	0	0	1	0	4	0	1	6	
b3		1	1	0	1	0	0	3	0	1	7	
a0		1	1	1	4	0	1	0	4	0	12	
b0		0	0	0	1	13	0	2	1	0	18	
計		78	11	1	12	14	2	21	5	14	9	167

8. 高知市春野町, 高知市上町, 安芸市, 土佐市方言 (以上中央式) —— i群とii群の対立

前節を受け, 更に高知県 (中央式の地域) で, 高知市春野町 (1932年生れ), 高知市上町 (1946年生れ; 中井編 (1997) と同じ話者), 安芸市 (1949年生れ), 土佐市 (1927年生れ) の4名を調査した³⁹。春野町の話者は南あわじ市と同様にi1群は「13」をむしろ基本とし, 安芸市・土佐市も「13」を自由異音とする。上町の話者は京都と同様に「13」(i2群)を稀にしか用いない。i3群は「1357…、15…」のいずれも可能である。以下に体系と比較を示す。

³⁹ 無核文節「～が」に低起式の特殊拍が続いて「○[○○○]があ[る]」などとなったり, 低接「と」などの前で特殊拍が少し下降して「[○○○!ん]と」などと聞こえることがあるが, これらは当然, 無核と記述する。

表 8. 高知市春野町, 高知市上町, 安芸市, 土佐市方言の 4 モーラ置語の体系と比較

		式と下げ核		13	a1	a2	a3	b2	b3	a0	b0	計
高知市春野町	形動	ピ[カピカ]じゃ, [サンザン]じゃ		4	0	2	1	10	1	12	164	194
	ト副	[ピ]カピカと, [ホソ]ボソと		389	226	37	0	15	0	37	0	704
	副詞	[つ]い[つ]い, [たまたま		10	7	13	1	18	0	13	3	65
	感動	[や]れ[や]れ, さ[て]さて		5	1	0	0	3	0	0	1	10
	名詞	[つき]づき (月々)		0	3	27	0	15	8	10	12	75
		計		408	237	79	2	61	9	72	180	1048
高知市上町	形動	ピ[カピカ]や, [サンザン]や ⁴⁰		2	1	4	5	10	2	15	160	199
	ト副	[ピ]カピカと, [ホソ]ボソと		2	460	45	38	0	0	48	0	593
	副詞	[つ]い[つ]い, [たまたま		1	11	15	13	15	1	17	1	74
	感動	[や]れ[や]れ, さ[て]さて		3	7	0	0	3	0	0	0	13
	名詞	[つき]づき (月々)		0	5	28	3	10	5	12	15	78
		計		8	484	92	59	38	8	92	176	957
高知県安芸市	形動	ピ[カピカ]じゃ, [サンザン]じゃ		3	3	2	1	6	1	13	167	196
	ト副	[ピ]カピカと, [ホソ]ボソと		55	439	36	0	1	0	59	7	597
	副詞	[つ]い[つ]い, [たまたま		4	10	9	1	15	1	14	7	61
	感動	[や]れ[や]れ, さ[て]さて		5	1	0	0	3	0	1	0	10
	名詞	[つき]づき (月々)		1	7	28	0	11	5	8	16	76
		計		68	460	75	2	36	7	95	197	940
高知県土佐市	形動	ピ[カピカ]ぢゃ, [サンザン]ぢゃ		3	3	3	1	8	2	15	160	195
	ト副	[ピ]カピカと, [ホソ]ボソと		148	425	0	0	3	0	52	0	628
	副詞	[つ]い[つ]い, [たまたま		0	14	6	0	16	2	17	2	57
	感動	[や]れ[や]れ, さ[て]さて		3	4	0	0	4	0	0	0	11
	名詞	[つき]づき (月々)		0	2	27	1	12	10	11	12	75
		計		154	448	36	2	43	14	95	174	966

語群		i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	余	計
高知市春野町	13	377	22	3	5	0	0	1	0	9	7	424
	a1	203	18	19	2	0	0	1	0	8	2	253
	a2	9	32	2	6	1	0	30	1	1	5	87
	a3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2
	b2	13	12	0	6	0	1	25	1	3	17	78
	b3	0	0	0	0	0	0	2	0	6	2	10
	a0	9	1	30	12	0	12	3	7	2	1	77
	b0	0	0	0	3	140	4	4	8	1	22	182
	計	611	85	54	34	141	17	67	17	30	57	1113
高知市上町	13	2	0	0	0	0	0	1	0	4	1	8
	a1	452	23	3	4	0	0	1	0	18	14	515
	a2	17	41	0	8	0	0	33	1	1	7	108
	a3	11	37	0	7	0	1	10	0	2	5	73
	b2	0	0	0	4	2	1	18	0	2	13	40
	b3	0	0	0	0	0	0	4	0	4	0	8
	a0	15	3	36	17	0	13	5	7	1	4	101
	b0	0	0	0	1	136	3	5	9	3	21	178
	計	497	104	39	41	138	18	77	17	35	65	1031

⁴⁰ 低接「と」などによって特殊拍が「[OOO]ん」となどと下がり切り, 有核と記述せざるをえない話者もいた。方言によって「[サンザン]や」と「[サンザ]んや」で核の有無が異なるのは, この事情によると考えられる。

語群	i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	余	計	
高知県 安芸市	13	53	6	3	3	0	0	0	7	5	77	
	a1	428	15	11	2	1	0	1	11	11	481	
	a2	11	33	0	7	0	0	31	0	0	4	86
	a3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2
	b2	0	1	0	4	0	0	22	0	4	9	40
	b3	0	0	0	0	0	0	3	0	5	0	8
	a0	26	5	37	12	0	13	3	4	1	4	105
	b0	7	0	0	6	138	6	6	11	1	24	199
	計	525	60	51	34	139	19	67	16	29	58	998
	高知県 土佐市	13	142	8	3	1	0	0	1	0	3	3
a1		396	43	6	8	1	0	1	0	13	9	477
a2		0	0	0	3	0	0	28	0	0	5	36
a3		0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
b2		1	3	0	4	0	1	21	0	3	14	47
b3		0	0	0	0	1	0	5	0	8	1	15
a0		20	2	35	14	0	13	4	8	1	6	103
b0		0	0	0	2	138	2	4	9	1	19	175
計		559	56	44	32	140	16	66	17	29	57	1016

高知県の中央式は形容詞が2型を保つなど、古態をよく留めていることで知られる。仁淀川以東の春野町・上町・安芸市ではi群とii群の対立が保たれており、土佐市は、仁淀川を挟んで東側の高知市春野町の状態から、ii群がi群に合流して成立したと見られる(理由は後述)。i群は「13~a1」(または「a1~13」)で、ii群は原則「a2」である。上町(城下町で、春野町の北)の話者は「a2~a3」だが、「a3」は併用形として挙げられるに過ぎない。「a2」を持ついくつかの語は「13~a1」を併用形とするが、ii群の独立を脅かすほどには至っていない。上町の「b2」はゼロとなっているが、実際には「a2」と規則的に併用される。但し、無標形「a2」に対する表出形が「b2」であり、語用論的意味は異なるが、語彙的なものではない⁴¹。

⁴¹ なお、形容詞は「軽い」等の「a2」と「白い」等の「a1」の2型に分かれるが、これら無標形「a2, a1」に対して表出形「b2」が存在し(更に語頭を伸縮性のある長音にすることで、形容詞の意味の程度の強さを表わす:「[かる]い→かー[る]い, [しろ]い→しー[ろ]い」)、情態副詞「軽々と」等における「a2, b2」併用現象と並行している点を、上町の話者(中井編(1997)の話者)に教えていただいた。また、高山(2013a)の発表時に、低起式に見えるものは境界音調の一種の可能性があると指摘を受けたが、話者の内省は低起式で、録音を確認してもピッチの低下自体に伸縮性は認められない(※伸縮性は語頭の長音化が引き受ける)。

更に上町の話者より伺ったことを記す。表出形の表わす感情がプラスかマイナスかは、或る程度、その語幹の意味に影響されて偏りが生じる。形容詞の表出形の引き音は、終止連体形のみ必須で、他の活用形では任意となり、派生された情態副詞に引き音は現れない。名詞「[カルサ, シ[ロサ]や, [アカ]イ, [マル]イ, [ウ]マイ, [フ]カイ, [ヨ]ワイ」に対する名詞「[アカミ, [マルミ, [ウ]ミ, [フ]カミ, [ヨ]ワミ」に表出形は存在しない。活用形を挙げる(表出形には「表」を付ける):「[かる]い, かー[る]い(表), [しろ]い, しー[ろ]い(表), [かる]いろー, かー[る]いろー(表), [しろ]いろー, しー[ろ]いろー(表), [かる]かった(表), し[ろ]かった(表), しー[ろ]かった(表), [かる]ければ, か(ー)[る]ければ(表), し[ろ]ければ, しー[ろ]ければ(表)」。なお「*かるや」のような「や」を付ける形は存在しない。また、引き音は撥音でもよい:「[アオ]イ, アー[オ]イ(表), アン[オ]イ(表), [マル]イ, マー[ル]イ(表), マン[ル]イ(表), [ヨ]ワイ, ヨー[ワ]イ(表), ヨン[ワ]イ(表), [ク]ロイ, クー[ロ]イ(表), クン[ロ]イ(表), [セ]マイ, セー[マ]イ(表), セン[マ]イ(表), [ナ]ガイ, ナー[ガ]イ(表), ナン[ガ]イ(表)」。子音により促音の場合がある:「[アカ]イ, アッ[カ]イ(表), [ウス]イ, ウッ[ス]イ(表), [チ]カイ, チッ[カ]イ(表), [ホ]ソイ, ホッ[ソ]イ(表)」。このような表出形は語幹が2拍の形容詞とその疊語の情態副詞に存在するが、他の形容詞、情態副詞、形容動詞、意味的に形容詞に近い名詞などには、約60語調べたが、確認されなかった。他方で、情態副詞でなくただの副詞であっても「(時期が)[チカ]ヂカ, チ[カ]ヂカ(表)」が区別される。

上町の状態に加えて、春野町では ii 群に語彙的な「b2」が一定数存在するが、意味に偏りが見られる。1つ目は、「薄々、ウマウマと、オチオチと、怖々と、マザマザと、マジマジと」のように情意表出的な意味のもので、2つ目は「飽き飽きと、在り在りと、生き生きと、懲り懲りと、伸び伸びと」のように動詞を2回繰り返すタイプのものである⁴²。これらは無標形「b2」に対して表出形が逆に「a2」となる。情意表出的なものは、表出形ばかり使われた為は無標と有標が逆転したと考えられる。動詞を2回繰り返すタイプのもは、そのようなアクセント規則が外部から ii 群に侵入して来ていると解釈される。安芸市（高知市から東へ離れた地点）の語彙的な「b2」は「ツクツクと」で、土佐市の語彙的な「b2」は「繁々と、シミジミと、ツクツクと」であり、情意表出的なものに限られている。土佐市では「a2」は i 群に合流した一方で、「b2」の一部は取り残されたと解釈される。以上⁴³を踏まえた上で、通時的考察の中心となる、高知県（中央式の地域）の ii 群の語彙的な形は「a2」となる。

9. 甕島方言（九州二型）、院政期京都方言（文献）——式保存の法則と式の対応

鹿児島県上甕島里方言（以下甕島方言）では声調（文節の次末で一旦上昇した直後に下降する「A」と、文節末でただ上昇する「B」）が弁別的である。但し鹿児島市では「A,B」とも低く始まるのに対し、甕島では語頭隆起のため高く始まり文節末付近で上昇する直前まで高い。また言い切り形はともかく、接続形では「A」なら文節末の下降が生じず（条件により上昇すら生じない場合も）、「B」なら上昇が生じないので、語頭隆起の長さで「A/B」が対立する。また「だ」に対応する「やい」は「低接」で、短い語に「やい」が付くと対立が中和する。特殊拍の扱い等、詳細な論点は先行研究（窪菌 2012, 児玉 2012）を参照されたい。

以下に語例・体系・比較を示す。「やい、すい、ない」は順に「だ（る）、する、なる」に対応する。甕島では情態副詞に対して、引き音を伴う結果副詞（フラフラー（本土ではフラフレーとも）、カチカチー、ラブラビー、スペースー、ボロボレー等）が対立する。引き音を「に」に換えても「B」だが、他方「やい」が付くと「A」となる。用意した調査票の不備により下表の数値は多少混乱している。1948年生れ（里・菌上）、1950年生れ（里・菌中）の2名の話者にそれぞれ約6割ずつ担当していただき照合・合算した延べ1名のデータとなる。

表 9. 甕島方言における「A/B」の対立例、甕島方言の4モーラ置語の体系と比較

葉	A		[ハ]と	ハ[か]ら	[ハ]・やい
菌	B	[ハ]	ハと	[ハ]か[ら]	
鼻	A	[ハ]ナ	ハ[ナ]と	[ハ]ナ[か]ら	ハ[ナ]・やい
花	B	ハ[ナ]	[ハ]ナと	[ハ]ナ[か]ら	

⁴² 対照の為に実験的に調べている項目：「撫で撫で、塗り塗り、混ぜ混ぜ、揉み揉み」は「b2」, 「剃り剃り」は「b3」で、同様の音形を示した。なお南あわじ市阿万の「b2」はこのタイプと同様の分布を示す。

⁴³ なおこれらの他に、取り立て形（とりたて詞に類する意味を加える強調形）の一種として、「[ハ]ルサメが（春雨）、キョ[オ]ダイで（兄弟）」を「[ハ]ルサ[メ]が、キョ[オ]ダ[イ]で」のように、文節次末のモーラを高める形式が規則的だが（上町の話者の詳細な内省調査あり）、ii 群も頻繁にこの取り立て形で実現し、無標形「[ホソ]ボソと」に対して、表出形「ホ[ソ]ボソと」、取り立て形「[ホソ]ボ[ソ]と」、表出形の取り立て形「ホ[ソ]ボ[ソ]と」がいずれも、少なくとも高知市上町・春野町では可能である。また「[ハ]ルサメが、」のように文節末のモーラを高めて短いポーズを置く「弱い」取り立て形（選択理由が曖昧・些細）と使い分ける。

女	A	オ[ナ]ゴ	[オ]ナ[ゴ]と	[オナ]ゴ[か]ら	オ[ナゴ].や[い]
男	B	[オ]ト[コ]	[オト]コ[と]	[オトコ]か[ら]	[オトコ].や[い]
甘酒	A	[ア]マ[ザ]ケ	[アマ]ザ[ケ]と	[アマザ]ケ[か]ら	[アマザケ].や[い]
唐傘	B	[カ]ラ[カ]サ	[カラ]カ[サ]と	[カラカサ]か[ら]	[カラカサ].や[い]
情態副詞 (～と)	A	[ピ]カ[ピ]カ	[ピ]カピカ[す]い	[ピ]カ[ピカ].や[い]	
結果副詞 (～に)	B	[ピカピ]カ[ー]	[ピカピ]カ[ー].[す]い	[ピカピ]カ[ー].ない	
夏	A	[ナ]ツ			
春	B	ハル			
行く	A	[イ]ク			
書く	B	カク			
夏休み	A	[ナツ]ヤ[ス]ミ			
春休み	B	[ハルヤ]ス[ミ]			
行きやれ	A	イッ[キヤ]レ			
書きやれ	B	[カツ]キヤ[レ]			
夏休みだ	A	[ナツ]ヤスミ.や[い]			
春休みだ	B	[ハルヤ]スミ.や[い]			
行きやり申せ	A	イッ[キヤ]イ[モ]セ			
書きやり申せ	B	[カツ]キヤイ[モ]セ			

		「A/B」と和語/漢語	A和	B和	A漢	B漢	計
上 甌 島 里	形動	ピカピカーB, 擦れずれにB	42	117	4	11	174
	卜副	赤ターとA, 青ターとB	362	67	20	19	468
	副詞	たびたびA, ときどきB	29	17	4	6	56
	感動	やれやれA, どれどれB	8	2	0	0	10
	名詞	くちぐちA, すみずみB	32	35	4	4	75
		計	473	238	32	40	783

		語群	i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	余	計
上 甌 島 里	A; 前部単独 A		49	12	2	9	6	6	23	5	6	10	128
	A; 前部単独不明		288	2	16	6	21	3	4	1	10	10	361
	A; 前部単独 B		22	1	0	2	1	0	1	0	2	1	30
	B; 前部単独 A		3	0	1	0	10	0	2	1	1	4	22
	B; 前部単独不明		32	7	15	7	66	6	5	8	3	15	164
	B; 前部単独 B		12	27	3	5	17	2	30	1	5	12	114
		計		406	49	37	29	121	17	65	16	27	52

前部要素が「A」ならば全体も「A」に、「B」ならば「B」になる傾向があり、生産的な語では顕著である。この複合語規則は京都方言などの「a/b」におけるいわゆる式保存の法則と対応し、更には「A/B」が院政期京都方言の「a/b」と対応することが知られる。下表に院政期京都方言（秋永（1991）、秋永ほか編（1997）参照）に対する、本稿で扱う各地の対応を例示する。なお沖永良部島では「半」を「判（印鑑）」で代用した（沖永良部島の記号は次節参照）。「#」はデータ無し、院政期京都の「ax, bx」は式保存の法則により複合語と前部要素の式を双方向に推定したもの、「b1, ba, bb, b0」は順に「[[○]○, [[○○, ○○(低平), ○[○]」を表わす。横の番号は順に「1 広島市, 2 尾道市（話者2名照合）, 3 岡山市（話者1名）, 4 東京, 5 東村山市（話者6名照合）, 6 盛岡市（辞典と話者1名照合）, 7 青森市（話者3名照合）, 8 京都, 9 南あわじ市, 10 高知県（話者4名照合）, 11 院政期京都, 12 甌島（話者2名照合）, 13 沖永良部島」を表わす。「類」は金田一語類・早稲田語類（動詞2類は（2）とした）。対応を見ると、甌島と沖永良部島は「bb」の「b-」を保ち、京都や南あわじ市では「bb」が「a1」に変化する。甌島方言は確かに古い形での「a/b」対立と式保存の法則を保つが、式保存の法則が共時的にも生産的に働く点には留意すべきである。即ち、前部要素の型を複合語全体に過剰適用する可能性があり、「a/b」対立の無い語群に類推で対立が生じたかもしれない。なお「38 まづ, 39 よく」の「A」は鹿児島本土にも通じる規則的な例外である（上野 2006: 39）。

表 10. 日本語諸方言の 2 拍語 60 語における式と核の対応 (表 18 参照)

番号	漢字	類	仮名	1 広	2 尾	3 岡	4 標	5 村	6 盛	7 青	8 京	9 淡	10 高	11 院	12 飯	13 沖	13 沖 segments
1	口	1	くち	0	0	0	0	0	0	0	a0	a0	a0	a0	A	a0]kucji[nu
2	此	1	これ	0	0	0	0	0	0	0	a0	a0	a0	a0	A	#	
3	末	1	すゑ	0	0	0	0	0	0	0	a0	a0	a0	a0	A	a0]sue[nu
4	其	1	それ	0	0	0	0	0	0	0	a0	a0	a0	a0	A	#	
5	暇	1	ひま	0	0	0	0	0	0	0	a0	a0	a0	a0	A	a0]hjima[ni
6	道	1	みち	0	0	0	0	0	0	0	a0	a0	a0	a0	A	a0]micji[nu
7	共	-	とも	0	0	0	0,1	0,1	1	0	a0	a0	a0	a0	A	a0]tumu[ni
8	誰	1?	たれ	1	0	0	1	1	1	1	a0	a0	a0	a0	A	a0]taru[nu
9	謎	-	なぞ	0	0	0	0	2,0	2	0	b2	a0	a0	ba	A	#	
10	国	1	くに	0	2,0	0	0	0,2	0	0	a0	a0	a0	a0	A	a0]kuni[nu
11	品	1	しな	0	2,0	0	0	0,2	0	0	a0	a0	a0	a0	A	a0]sjina[nu
12	端	1	はし	0	2,0	0	0	0,2	0	0,2	a0	a0	a0	a0	A	a0]Fasji[nu
13	先	1	さき	2	2	2	0	0	0	0,2	a0	a0	a1	a0	A	a0]sacji[nu
14	程	1?	ほど	2	2	2	0	0,2	2	0	a0	a0	a0	a1	A	#	
15	否	-	いや	#	0	0	1	0,1	2	2	a0	#	a0	ax	A	#	
16	偶	-	たま	0	0	0	0	0	0	2	a0	a0	a0	ax	B	b2	ta[ma]ni
17	様	1?	さま	2	2	2	2	2	2	2	a1	a0	a0	a0	B	#	
18	人	2?	ひと	0	0	2	0	0,2	0	0	a1	a1	a1	a1	A	a0]cjuR[nu
19	又	-	また	#	1	1	0	2	0	0,2	a1	a1	a1	a1	A	b2	ma[ta]ka
20	方	2	かた	#	2	2	2	2	1	2	a1	a1	a1	a1	A	#	
21	下	2	しも	#	2	2	2	0,2	0	2	a1	a0	a1	a1	A	#	
22	次	2	つぎ	2	2	2	2	2	2	2	a1	a1	a1	a1	A	a0]cugi[nu
23	町	2	まち	2	2	2	2	2	0	2,0	a1	a1	a1	a1	A	a0]macji[nu
24	皆	2	みな	#	2	1	2	2	0,2	2	a1	a1	a1	a1	A	#	
25	村	2	むら	2	2	2	2	2	2	2,0	a1	a1	a1	a1	A	#	
26	毬	2?	いが	2	2	2	2	2	0	2	b2	b0	b2	a1	B	#	
27	向	-	むき	1	1	1	1	1	1	1	b2	b2	a0	a1	A	a0]muki[nu
28	其	4?	そこ	2	2	2	0	0	2	0,2	b0	b0	b2	b0	B	#	
29	後	4	あと	1	1	1	1	1	1	2	b0	b0	b2	b0	B	b2	a[tu]nu
30	数	4	かず	1	1	1	1	1	1	1	b0	b0	b0	b0	B	#	
31	隅	4	すみ	1	1	1	1	1	1	1,2	b0	b0	b0	b0	B	#	
32	中	4	なか	1	1	1	1	1	1	2	b0	b0	b0	b0	B	b2	na[R]nu
33	何	4	なに	0	0	0	1	1	1	1	b0	b0	b0	b0	B	b2]nuR[nu
34	我	4	われ	#	1	1	1	1	1	1	b0	b0	b2	b0	B	b2]waN]nu
35	未	-	まだ	1	1	1	1	1	1	1	b0	b0	b0	b0	B	b2	ma[da]ka
36	取	(2)	とる	#	1	1	1	1	1	1	b0	b0	b0	b0	B	b1]tu]ju%N
37	見	(2)	みる	1	1	1	1	1	1	1	b0	b0	b0	b0	B	b1]mi]ju%N
38	先	-	まづ	#	1	1	1	1	1	1	a1	a1	a1	b1	A	#	
39	能	-	よく	#	1	1	1	1	1	1	a1	a1	a1	b1	A	b1	ju[kwa]N
40	前	5	まへ	1	1	1	1	1	1	1	a1	a1	a1	b2	B	b2]meR]nu
41	声	5	こゑ	1	1	1	1	1	1	1	b2	b2	b2	b2	B	b2	Fu[i]nu
42	更	-	さら	1	1	1	1	1	1	1	b2	b2	b2	b2	A	#	
43	常	5	つね	#	2,1	1	1	1	0,2	2	b2	b2	b2	b2	B	#	
44	唯	5?	ただ	1	1	1	1	1	1	1	b0	b0	b0	b2	B	b2	ta[da]nu
45	尚	-	なほ	1	1	1	1	1	1	1	b0	b0	b0	b2	A	#	
46	粉	-	こな	2	2	1	2	2	2	2	b0	b0	b0	bx	B	b1]ku]R%
47	神	3	かみ	2	2,1	1	1	1	2	1	a1	a1	a1	bb	B	b1]ha]mi[nu
48	半	-	はに	#	1	2	1	1,2	1	0,1	a1	a1	a1	bx	B	b1]Fa]N%
49	家	3	いへ	2	2	2	2	2	2	2	a1	a1	a1	bb	B	#	
番号	漢字	類	仮名	1 広	2 尾	3 岡	4 標	5 村	6 盛	7 青	8 京	9 淡	10 高	11 院	12 飯	13 沖	13 沖 segments

番号	漢字	類	仮名	1 広	2 尾	3 岡	4 標	5 村	6 盛	7 青	8 京	9 淡	10 高	11 院	12 鮓	13 沖	13 沖 segments
50	色	3	いろ	2	2	2	2	2	2	0,2	a1	a1	a1	bb	B	b1	[i]ru%R
51	草	3	くさ	2	2	2	2	2	2	2	a1	a1	a1	bb	B	b1	[ku]sa[nu
52	事	3	こと	2	2	2	2	2	2	2	a1	a1	a1	bb	B	b1	[ku]tu[nu
53	島	3	しま	2	2	2	2	2,0	2	2,0	a1	a1	a1	bb	B	b1	[sji]ma[nu
54	月	3	つき	#	2	2	2	2	2	2	a1	a1	a1	bb	B	b1	[cji]cj%R
55	時	3	とき	2	2	2	2	2	2	2	a1	a1	a1	bb	B	b1	[tu]ki[nu
56	年	3	とし	2	2	2	2	2	2	2	a1	a1	a1	bb	B	b1	[tu]sji[nu
57	節	3	ふし	2	2	2	2	2,0	2	2	a1	a1	a1	bb	B	a0]Fusji[nu
58	山	3	やま	2	2	2	2	2	2	2	a1	a1	a1	bb	B	b1	[ja]ma[nu
59	元	3?	もと	0	2	2	2,0	2,0	2	0,2	a1	b2	a1	bb	B	b2	mu[tu]nu
60	後	3?	のち	0	0	2	2,0	2,0	2,1	2,0	a0	a0	a0	bb	A	#	

10. 沖永良部島方言（琉球多型）——「カナガナーと」に見られる引き音

松森（2000, 2012）を参考に、類・系列の区別が明瞭で体系の解釈も明快な地点として鹿児島県沖永良部島国頭を選び、1943年生れの話者1名（国頭・中部）にお願いして、名詞、動詞、形容詞、4モーラ畳語のセグメント、アクセント、文法調査を実施した。4モーラ畳語の体系と比較以外については高山（2013c）にデータと分析をまとめたので、本稿では重複を避け、最低限の点にだけ触れる。セグメント表記は上野善道らが用いている方式を基本とする（例：F[Φ], c[ts], hj[ç], sj[ç], cj[te], zj[(d)z], R（引き音）, N（撥音）, Q（促音））。表記方針は「弁別的な音声のローマ字転写」とし、例えば [çi] は /hi/ でなく hji と書く。声門閉鎖音を伴う半母音や喉頭化子音は大文字で表記する（例：]JuR[nu（魚の）、[Ma]R%（馬））。アクセントの表記と解釈は上野（1992, 2006）を基本とする。アクセントは一種の上げ核であり、その有無と位置（nモーラ語にn種の位置）が弁別的である。通時的にはいわゆる高起群が無核で低起群は有核だが、共時的には無核文節が低く始まり、有核文節は、語頭核語以外は高く始まる。通時的な高起群、低起群に属することを順に「a, b」で表わす。無核文節は低く始まり、最終拍に向けて緩やかに上昇するので、これを例えば「]○○○[○]」のように表記する。また、無核を「0」で表わす（従って無核語は「a0」と表わせる）。有核文節が有する核は、その位置の次を上げる性質のほか、上げ核の定義とは別に、その位置の前があれば語頭隆起させる性質も有する。上げ核による上昇よりも語頭隆起からの下降の方が強く発音される場合もある。上げ核による上昇が弱い場合は「%」（半上昇）で表わす。語幹末のモーラから逆算指定でn拍目の上げ核を「-n」で表わす（従って有核語は「b-n」と表わせるが、「bn」と略す）。すると例えば「[○]○[○○]」は「b3」と表わせる。松森晶子（2000, 2012）のA, B, C, (D) 系列は順に a0, b1, b2, (b3) に対応する（但しD系列の存在にはまだ問題がある）。「b1」のn拍語で言い切ると最終拍が上昇により引き伸ばされ、「[○]R%, [○]○[R], [○○]○[R], [○○○]○%」のようになる。1モーラ伸びる場合だけRを書き足すが、「%」の直後も少し伸びている。上げ核で上がったあと、もし文節に余りがあれば普通はその後下降するが、そのまま高く進んでもよい（異音と見られる）。名詞は2モーラ1音節語と2モーラ2音節語に「a0, b1, b2」、3モーラ語に「a0, b1, b2, b3」、4モーラ語に「a0, b1, b2, b3, b4」が存在し、nモーラ語にn+1の型がある。動詞は2モーラ語に「a0, b1」、3, 4, 5モーラ語に「a0, b2」が存在し、2型である。

形容詞⁴⁴ は「a0, b1, b2」の3型だが、「b2」は4例しか見当たらず、新たに生じた型と考えられる⁴⁵。以下に4モーラ型語の体系と比較（琉球独自の語彙⁴⁶を含む）を示す。

表 11. 沖永良部島国頭方言の4モーラ型語の体系と比較

		上げ核の有無と位置	a0	b1	b2	b3	b4	計
沖 永 良 部 島 国 頭	形動	[hji]cja[hjicja(ni) ; b3,]tubitubi[ni ; a0	6	1	4	113	3	127
	ト副	[hji]cja[hjicja(tu) ; b3, [hanaga]naR[tu ; b1	7	37	0	362	0	406
	副詞]tamata[ma ; a0, [tu]ki[duki ; b3	10	1	0	14	1	26
	感動]FuriFu[ri ; a0, [udou]do[R ; b1	2	1	2	2	0	7
	名詞]kunigu[ni ; a0, [sji]ma[zjima ; b3	18	2	1	22	3	46
		計	43	42	7	513	7	612

語群	i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii	ix	余	計	
沖 永 良 部 島 国 頭	a0	0	1	5	6	1	2	20	1	3	6	45
	b2	0	0	0	0	1	0	1	0	0	5	7
	b1	7	35	3	1	1	0	2	1	0	1	51
	b3	353	5	9	7	100	2	18	3	6	23	526
	b4	0	0	0	0	3	0	0	1	1	2	7
	計	363	41	17	14	103	4	41	6	10	37	636

v 群には東村山市に類似する意味の区別がある。東村山市の「個別感覚／共有感覚」に対して国頭では「独断／同意伺い」となり、「対自分（・家族）で、共感・了解を得ようとしな（従って他人に対して用いると相手の意思を無視した言い方となる）」形式と、「対相手（・他人）で、共感・了解を得ようとする」形式に分かれる。「対家族」が「独断」に含まれる点や、感覚の共有というよりその要請である点が東村山市と異なる。東京の終助詞「よ／ね」（話し手の一方的言明か、聞き手への共有の確認・促しか）の区別に近い。音形は、何らかの音変化に伴い相応に変化している（i 群が v 群に合流し、派生関係にある ix 群も並行して viii 群に近づく結果、「[waN]waN（犬 b4）」などとなる（東村山市の「4」に対応する形）。v 群の形容動詞と派生形の viii 群は「[bu]cu[bucunu [ni]bu[tu（b3；同意伺い，nibutu は腫物），bu[cu]bucunu [ni]bu[tu（b4；独断），[ni]bu[tunu bu[cu]bucu などとなり、東村山市の形容動詞・

⁴⁴ 形容詞から生産的に派生する情態副詞があるが、「sa」を含むことがあるため革新と見る：「[hji]R[sa]N（b1 寒い），nuN[gi]saN（b2 恐ろしい）」に対し、「[hji]R[sahji]Rsa[tu]（a0 寒々と），]nuNginuNgi[tu]（a0 怖々と）」。

⁴⁵ 原因としては、何らかの音韻条件によって生じた可能性の他に、高知県（中央式の地域）の形容詞の無標形「a2, a1」（順に院政期の高起式・低起式由来）に対する表出形「b2」のように、語用論的意味を表わす第3の型が、固定化され、言わば「語彙化」した可能性もある。「語彙化」の例としては情態副詞「a2」の表出形「b2」（安芸市「ツクツクと」、土佐市「繁々と、シミジミと、ツクツクと」）が挙げられる。語用論的意味を表わす「b2」が健在の高知市上町は語彙化が起こっておらず、高知市春野町は語彙化が進行中の状態と考えられる。

⁴⁶ ii 群の独自語彙として「[hanaga]naR[tu（愛々b1；和気藹々と），[sabisa]biR[tu（寂々b1），[usuu]suR[tu（薄々b1；薄っすらと）（左記3つは『日国』に記載），[ki]R[gi]R[tu（黄々b1），[nuR]nuR[tu（何々b1；一風変わって），[hji]R[bi]R[tu（日々b1；日常的に）」、iv 群に「[ji]ru[jiru（ヨルヨル b3；ヨナヨナと仮に対応づける；[ji]ru%R（ヨル b1）」、vii 群に「]sjaRzjaR[nu（下々 a0；シタジタに該当；]sjaR[nu（シタ a0），]sjiRzjiR[nu（隅々 a0；シリジリに該当；]sjiR[nu（後・隅 a0），[nuR]nuR[nu（何々 b1；ナニナニと仮に対応づける；[nuR]nu（何 b2），[ja]R[ja]Rnu（家々 b3；屋々に該当；[ja]R[nu（家 b1）」を認め、ほか i 群，v 群，viii 群にもいくつか認めた。これらは抽象的な語群に対して比較するものである。

名詞の形態の区別「0/4」と国頭の「b3/b4」⁴⁷とは、多人数調査をすれば、比較できる⁴⁸。

ii 群は原則「b1」⁴⁹である(東村山市の「3」に対応する形; 甌島に見られる「A/B」対立は式保存の法則による類推の産物と見る)。「tu」が義務的で、語幹が4音節の語では語幹末に引き音が付く。この引き音は甌島でも17語で語彙的に保たれるが、国頭では規則的に現れる。次節の徳永晶子の文献調査によれば琉球各地に同様の形が確認される⁵⁰。地理分布からこの引き音は琉球方言の古形と見るが、本土と比較した場合、アクセントの影響で生じた可能性がある。なおii群の情態副詞は、甌島以北では「2モーラの要素」の表わす意味の「程度が甚だしいこと」を表わすが、国頭では「広範囲で不揃いなこと、斑のある広がり(飽和)」を表わす。「黒々と(焦げたパン)」は「真っ黒に」でなく「殆どが黒く」となる。「]hana[sjaN(愛しいa0)」の「(愛情が)一対一, 集中」に対して「]hanaga]naR[tu(愛々)」は「(愛情が)多対多, 拡散」(即ち, 和気藹々)を意味し、「非常に愛しい」という意味にはならない。

iii 群と vi 群は「b3」の勢力も強いが、語彙の日用性や京都との対応から見て「a0」(doRdoRtu, meNmeNtu, moRmoRtu, mukumukutu, rakurakutu, tubitubini, maNmaNni)が本来の形と考える(甌島の「A/B」対立は類推の産物と見る)。他方で、iv 群と vii 群の「a0, b3」は甌島や京都(現代, 院政期)と比較して、本来の「a/b」対立である可能性も考えられる(但し「b3」は iv 群では東村山市の「0」に、vii 群では「2」に当たる)。また viii 群と ix 群は「b3, b4」が多いが、甌島や京都と比較して「a0」(teNteN, FuriFuri(これこれ; 感動), cuicui)も本来の形か。

11. 琉球方言(セグメント)——「ピカーピカ」に見られる引き音

本節は徳永晶子による調査研究を筆者が編集し、若干加筆したものである⁵¹。i 群のセグメントは沖永良部島知名・国頭において、無標形 /CVCV-CVCV/, 強調形 /CVCVR-CVCV/ (国頭の例: [inabi]ka[rinu [pi]kaR[pika, [hamidu]ru[nu [go]roR[goro)となる(/-/は内部境界; /S/は /C/に含める)。この /R/ は非弁別的で、辞書等の見出し語への記載も殆ど無いが、口頭の回

⁴⁷ 他の4拍語で「b3, b4」が自由に交替する例が見られたが(例: [ku]ni[gaminu, ku[ni]gaminu, [ku]N[zjainu, [ku]N[zjainu (~[cjuR; 国頭の人)), 3拍語で「b2, b3」が自由に交替する例は見られなかった。

⁴⁸ 以下のことは、アクセントによる区別ではないので東村山市と直接比較することはできないが、共時的体系として記述される。「b3」の語幹に対して「tu, ni」が付かなければ「独断」、付けば「同意伺い」となり、文中の情態副詞、結果副詞ではセグメントが意味の区別を担う。文末では、例えば語幹「[Fu]ja[Fuja, [Fa]R[Fa(R) (ほやほやb3)」に対して、「[daR(だ; 断定の終助詞; 借用語か), [dja]R(では; 話し手の自信のなさを表わす終助詞), [doR(だぞ; 伝達の終助詞), [jaQ]saR(だよ; コピュラ+終助詞サ), ja[sji]ga(だが; コピュラ+接続助詞シガ), [sjuN(する; 動詞), [sjuQ]saR(するよ; 動詞+終助詞サ)」のような「文末の要素」(それぞれの品詞・意味については全てを厳密に確かめたわけではない)が、「低接」すれば「独断」、「高接」すれば「同意伺い」となる(他の環境では異音に過ぎない下降が、局所的に語用論的意味の区別を担う)。

⁴⁹ [oR]oR[tu(青々), [aR]aR[tu(赤々), [MaR]MaR[tu(旨々), [utiu]tiR[tu, [haruga]ruR[tu, [kuragu]raR[tu, [kurugu]ruR[tu, [Fumagu]maR[tu, [sjimizji]miR[tu, [sjirazji]raR[tu, [sjuR]zjuR[tu(白々), [takada]kaR[tu, [nagana]gaR[tu, [namana]maR[tu, [namina]miR[tu, [noR]noR[tu, [nubinu]biR[tu, [heR]beR[tu(早々), [haruba]ruR[tu, [Fariba]riR[tu, [hjuR]bjuR[tu(広々), [Fukabu]kaR[tu, [Fusubu]suR[tu, [Funubu]nuR[tu, [Furibu]riR[tu, [mazama]zaR[tu, [mazjima]zjiR[tu, [maruma]ruR[tu, [juR]juR[tu, [juruju]ruR[tu, [rakura]kuR[tu。

⁵⁰ 与論島(cjikucjikuRtu), 石垣島(akaakaRtu, uFuuFuRtu, kanaganaRtu, cjirazjiraRtu, FuriburiRtu, jasjijasjiRtu, jaFajaFaRtu, rakurakuRtu), 石垣島(uFuuFuRtu, rakurakuRtu)。これらは次節の表12の数値から除外した。

⁵¹ 徳永晶子は各種文献調査と多数回の現地調査を行っており、本節を書く為の調査も実施した。本節の元となるデータ・文章と、表12・表13の元となる表を提供していただき、紙面・紙幅に合わせて加工・加筆した。

答では一定数現れる。ところが、琉球には /R/ を挟む無標形を有する地点が分布する。下表に調査結果を示す。横の番号は順に「1 石垣市登野城（宮城 2003），2 宮古島市城辺町（城辺スマフツ研究会編 2003, 2012），3 沖縄島那覇市（内間ほか 2006），4 沖縄島今帰仁村（沖縄言語研究センター2000），5 与論町麦屋（菊ほか 2005），6 沖永良部島知名町知名（徳永 2012a, Tokunaga 2012），7 徳之島天城町浅間（岡村ほか 2009, 徳永 2012b），8 奄美大島大和村大和浜（長田ほか 1977, 1980），9 喜界町阿伝・志戸桶・城久（竹田 2011）」を表わす。

表 12. 琉球諸島各地における畳語の音韻形態構造

構造 \ 地点		1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	
		石垣	宮古	那覇	今帰	与論	沖永	徳之	奄美	喜界		
無標群	1	/CVCV-CVCV/	22	37	18	17	17	58	12	61	50	292
	2	/CVCVR-CVCV/	26	56	0	9	0	7	45	0	0	143
	3	/CVCVR-CVCVR/	11	11	3	41	51	12	1	1	1	132
	無標群の割合 (%)		63	92	58	97	52	92	88	97	91	80
有標群	有標群の割合 (%)		37	8	42	3	48	8	12	3	9	20
	4	/CVQCVR-CVQCVR/	1	0	1	1	55	1	0	0	0	59
	5	/CVRCV-CVRCV/	16	1	2	0	2	3	2	0	4	30
	6	/CVQCV-CVQCV/	9	7	0	0	0	0	0	2	1	19
	7	/CVRCVR-CVRCVR/	6	1	4	0	5	0	0	0	0	16
	8	/CVCV-CVCVR/	2	0	8	1	0	3	0	0	0	14
	9	/CVCVQ-CVCV/	1	0	0	0	0	0	6	0	0	7
計		94	113	36	69	130	84	66	64	56	712	

2音節を繰り返す語（2音節畳語）は例外無く拾ったが、前節で例示した ii 群の分の数値は上表から除いた。多様な 2音節畳語の中でも複数地点で多数の語彙が採録されるのは上表の縦の番号の 1 から 3 番までで、4 番以降は地域に限られるか度数が小さい。そこで 1 から 3 番までを「無標群」、残りを「有標群」と推定する。無標群の中では各地点の最大度数の形を「無標形」と推定し（但し宮古島城辺の音形については後述）、太枠で示す。有標群の中では度数 3 以上の形を太枠で示す。無標形の地理分布を見ると、徳之島を除く沖永良部島以北は /CVCV-CVCV/、那覇を除く与論島以南は /CVCVR-CVCV(R)/ となる。但し徳之島浅間方言は「自立語は必ず重音節を 1 つは含む」（上野 2000）ため、共時的規則の影響も考えられる。琉球地域北部の与論島を含む広範囲に分布するため、/R/ を挟む無標形は琉球方言の古形である可能性が考えられる（各地で改めて詳しく調査した上で判断すべきだが、ここでは既存の辞典等のデータから「見通し」として、大まかに推定した）。本土の古形 /CVCV-CVCV/（山口 2002: 34-35）と比較すると、アクセントの影響で生じた可能性がある。

ところで、宮古島城辺では他と異なり、語中長音は寧ろ ii 群の特徴である。下表は『城辺町スマフツ辞典』に掲載された畳語 113 語のうち、本稿の語群との対応が明らかなものを選び出し、音韻形態構造の偏りについてまとめたものである。i 群の多くは /CVCV-CVCV/ 型を取るのに対し、（共時的な）ii 群の全てが /CVCVR-CVCV(R)/ 型を持つことが分かる。

表 13. 宮古島城辺の畳語の語類と音韻形態構造（『城辺スマフツ辞典』より）

構造\群	i	ii	iii	iv	例
/CVCV-CVCV/	7	0	0	0	i: カシヤカシヤ (かさかさ), ガヴガヴ (がぶがぶ), カラカラ, クタクタ, グルグル, ドゥルドゥル (どろどろ), パタパタ。
/CVCVR-CVCV/	1	7	1	1	i: ヌフーヌフ (ぬくぬく)。ii: アカーアカ (赤々), カス°ーカス° (軽々), クマークマ (細々), タカータカ (高々), ナガーナガ (長々), フカーフカ (深々), ヤスーヤス (易々)。iii: ラクーラク (楽々)。iv: ムトゥームトゥ (元々)。
/CVCVR-CVCVR/	0	1	0	0	ii: アヴーアヴー (青々)。
/CVN-CVN/	2	0	0	0	i: トウトウン (とんとん), ピンピン。
/CVRCV-CVRCV/	1	0	0	0	i: ユーサユース (ゆさゆさ)。
合計	12	8	1	1	

また、新たに ii 群に追加される語彙もある。下地 (2006: 103) 等が指摘するように、宮古諸方言の一部⁵² では形容詞語根の重複による畳語の形成が生産的で、城辺も同様である。形容詞語根の重複の場合、多くは /CVCVR-CVCV/ 型となる。意味的には「程度の強調」を表し、形容詞もしくは情態副詞として働く。『城辺町スマフツ辞典』より次に項目を引用する。

- タカムヌ。 ①人の背丈や木などが高い事。②品物の値段が高い事。値打がいい物。
 タカータカ。 とても高いこと。人の背丈や木、山などがそびえるようにして高いさま。
 フサムヌ。 臭いもの。腐ってにおうこと。
 フサーフサ。 とても臭いこと。嫌なおいがつんと鼻をつく。

このように宮古島城辺において語中長音は ii 群の特徴であり、また ii 群が独自の発展を遂げた結果、多くの形容詞が生産的に ii 群を構成する畳語を派生したと考えられる。i 群が語中長音、ii 群が語幹末長音を有する（基本的な）タイプの方言と、寧ろ ii 群が語中長音を有するタイプの方言とが存在することになり、琉球の畳語の長音を考察する際には注意を要する。

12. 院政鎌倉期, 室町江戸期, 現代の京都方言（中央式の成立）——歴史的な音変化

中井 (2003) を参考に京都方言における 4 モーラ畳語の変遷を見る。声点「平, 東, 上, 不明」は「L(低), F(拍内下降), H(高), X」で記す。秋永ほか編 (1997) より「(1) 院政鎌倉期, (2) 室町江戸期, (3) 現代」のデータを作成し、本稿の中央式のデータで (3) を補う。(1) に例が無いものは原則捨合わないが、(2) から (3) への情態副詞の変化を示すものは捨う。鈴木編 (2003: 196) 「サワサワに LLLHH (前田本), LLLLH (他)」は誤りと見て、前田育徳会尊経閣文庫編 (2002: 33), 石塚編 (2007: 139) の「LHLHH」を採る。X を含む併用形で他と一本化できるものはして、通時的に矛盾する併用形を除き、X を共時的・通時的に推定した上で、X がなお残る項目は除外し、以下に分析を示す。語例僅少のため方言で未調査の語彙の

⁵² 宮古群島の一つ伊良部島では、南区の長浜・国仲・仲地・伊良部集落で形容詞の重複が生産的であるのに対し、北区の佐良浜 (池間添, 前里添) では重複が起こらないとの回答が得られた (2012 年 9 月一橋大学中島由美ゼミ伊良部島調査より)。重複が生産的な方言では、情態副詞の ii 群も宮古島城辺と同様かもしれない。

一部を本稿の語群に割り振る。院政鎌倉期の語例を次に示す。a0:「いやいや(感動)(1)HHXX,(2)HHHH,HHLL,(3)HLLL, 偶々(1)HHXX,(3)HHHH, 泣く泣く(1)(2)(3)HHHH, 又々(1)HHXH,(1)(3)HLLL」。a1:「サヤサヤ(1)HLXX,(3)HLLL, バラバラ(1)HLXX,(3)HLLL, ハルバル(1)HLXX,(2)HLLL,HHLL,(3)HLLL, ヒソヒソ(1)HLXX,(2)(3)HLLL, ホノボノ(1)HLLL,(2)HHLL,(3)HLLL」。a2:「カツカツ(疲労)(1)HHLL, 区々(1)(2)HHLL,(3)HLLL, 愈々(1)(2)HHLL,(3)HLLL, 事々(悉)(1)(2)(3)HHLL, 益々(1)HHLL,(2)HLLL,(3)LHLL, まにまに(1)HHLL,(3)HHHH, 各々(1)(2)(3)HHLL,(3)LHLL, くまぐま(隈々)(1)HHLL, 品々(1)(3)HHLL, 人々(1)HHXX,(2)(3)HHLL」。a1.a1(2単位形;13と略す):「日に日に(1)HLHL,HLFL,(3)HLLL」。b00(低起式昇り核0下げ核0;以下同様):「種々(1)LLXX,(2)HHHL,(3)HHLL,LHLL, しかしか(然々)(1)LLLL,(2)LLHH,(3)LHLL, 時々(1)LLLL,(2)(3)LHLL」。b20:「きぬぎぬに(1)LHHH-H,(2)LHLL, ツダツダ(寸々)(1)LHHH,LLXX,(3)LLLH, 猩々シヤヅヤ(1)LHHH,(3)LLLH, タガタガ(幼児の初歩き)(1)LHHH, 時々(1)LHHH,(3)LLLH, ハタハタ(飛蝗)(1)LHHH,(3)LLLH」。b22:「交々(1)HLXX,(1)(3)LHLL, つらつら(1)(2)LHLL,(3)HLLL, ヨソヨソ(巍々)(1)LHLL, 声々(1)(2)(3)LHLL」。b30:「かつがつ(且々)(1)LLHH,(2)LHLL」。b33:「ほどほど(殆ど)(1)LLLH,LLHL,(2)(3)LHLL」。b40:「中々(1)LLLH,(2)HHLL,(3)HHHH」。b20b20(2単位形;24と略す):「サワサワに(1)LHLH-H, ハロハロに(遥々)(1)LHLH-H, 諸々(1)LHLH,(1)(2)(3)HHHH」。b20か24:「モヤモヤも(1)LHXX-L,(3)LLLH」。室町江戸期などの語例は秋永ほか編(1997)等を参照されたい。

表 14. (1) 院政鎌倉期, (2) 室町江戸期, (3) 現代の京都方言の体系と比較

		(1)(2)(3)の2式					a-				b-				計			
		(1)の昇り核					なし				3	2	4	3		2	0	24
		(1)(2)(3)の下げ核					13	1	2	3	0	3	2	なし				
(1) 院政鎌倉期	形動	[区]々, つ[だ]つだ			2							1			2	1	2	8
	ト副	[ほ]のぼの		5								2						7
	副詞	[偶]々, 時々(低平)	1		4		3	1				1	1			2		13
	感動	[否]々						1										1
	名詞	[品]々, こ[ゑ]ごゑ			4						1			4			1	10
		計	1	5	10	0	4	1	4	1	1	6	3	3				39
(2) 室町江戸期	形動	[区]々			1	1					1						3	
	ト副	[ほ]のぼの		1	21						3						25	
	副詞	[泣]々		4	6		1				6		1				18	
	感動	[此]々, [否]々			1		1										2	
	名詞	[人]々, こ[ゑ]ごゑ			2		2				2						6	
		計	0	5	31	1	4	0	12		1			0			54	
(3) 現代京都	形動	ま[ち]まち, ずたず[た]			1						2		3				6	
	ト副	[ほ]のぼの		29													29	
	副詞	[偶]々, [泣]々, ときど[き]		7	2		3				7		3				22	
	感動	[こ]れこれ, [い]やいや		2													2	
	名詞	[品]々, こ[え]ごえ			3		1				3		3				10	
		計	0	38	6	0	4	0	12		9			0			69	

		語群	i	ii	iv	v	vii	viii	ix	計			語群	i	ii	iv	v	vii	viii	ix	計	
(1) 院政鎌倉期		13							1	1	(2) 室町江戸期	a1	1							3	4	
		a1	3	2						5		a2	13	8	1		7			1	30	
		a2					8			8		b2	2	1	1		2					6
		b22	1					2		3		a0			1		1	1				3
		a0			2					2		b0					1					1
		b40			1					1		計	16	9	3	0	11	1	4			44
		b20				1	1	2		4		a1	19	10							5	34
		b00			1		1			2		a2					5					5
		24				2		1		3		b2			1		9					10
		計	4	2	4	3	12	3	1	29		a0			3			1				4
※ここでは見易さを考慮して、合計数値以外の0については省略した。											(3) 現代京都	b0			3	4		1			8	
												計	19	10	7	4	14	2	5	61		

i 群と ii 群は早くも合流済みである。「仄々」は HLLL > HHLL > HLLL と変化し、南北朝期の音変化の前から「a1」である。ix 群は 2 単位形も交えて i 群と同じ分布となる。iv 群は「a0, bx0」が古くから見られる。v 群は 2 単位形「LHLH-H/L (助詞ニ/モ; 秋永 (1991:193) 参照) (サワサワ, ハロハロ, モヤモヤ?) と 1 単位形「LHHH」(ツダツダ, モヤモヤ?) が見られる。viii 群の「諸々24」は高知市春野町「b2」、高知市上町・安芸市・土佐市「b0」、甕島 B 型、沖永良部島「[muRrumuR]ru[nu (b1), 前部単独 [muR]runu (b3; 「諸々の」と同義)」となるため、現代京都・南あわじ市の「a0」は革新と見られ、viii 群は v 群と同じ分布となる。vii 群は古くから「a2/b2」が一貫している(「事々a2, a3」の「a3」は併用形のため除外)。

13. 通時的考察 (i 群, ii 群, v 群) ——和語の情態副詞・形容動詞

まずは i 群, ii 群, v 群の音韻対応を通時的に解釈し、祖形を考察する上での主要な論点を取り上げて論ずる。また、現段階での祖形案を提示する。本稿のデータを踏まえ、下表を示す。下表では無核を「0」、語頭から n モーラ目の下げ核または昇り核を「n」、語幹末から n モーラ目の上げ核を「-n」、高起式・低起式を「a・b」、九州二型の A 型・B 型を「A・B」で表わす。便宜的に「H・L・F」で記す箇所がある。なお九州二型の「A・B」や、外輪式・沖永良部島国頭の無核・有核は、院政期京都の「a・b」に対応することが知られている。

i 群の 2 単位形について述べる。岡山市と南あわじ市に関して既に述べたように、語彙性の高い i1 群の「13」だけが、2 単位形の「古さ」に関する証拠になる。その南あわじ市と高知市春野町では、「13 : a1」の出現延べ数は順に 369 : 143, 377 : 203 で、いずれも「13」が基本である(「13」と「a1」の中間的な音声も存在するタイプの自由異音だが、どちらかに振り分けて数えた)。他方で、i2 群に現れる「13」は、より「新しい」型、lexical diffusion によって「a1」と分裂したのち、有縁的な意味の区別による使い分けが固定化された variation と見られる。下表で「(13)」などとアクセントが括弧に入れてあるのは、リスト読み上げ調査での出現が稀であることを表わす(その場合、文法・内省調査のデータが主となる)。「13~a1 (自由)」などとあるのは、自由異音の関係にあることを表わす。

表 15. 日本語諸方言の 4 モーラ置語 (i 群, ii 群, v 群) のアクセント対応

	i3 群	i2 群	i1 群	ii 群	v1/v2 群
1 青森市	15	(13)	裸 1, ト 1/0	ト 3, (2)	0/(4)
2 岩手県盛岡市	15,00	-	裸 1, ト 1/0, 4	ト(1), 0, 4, (2)	(0)/4
3 東京都東村山市	15~26	(13)	1~2 (無声化)	3	0/4
4 東京 (辞典)	?	?	1~2 (無声化)	3	0
5 岡山市	1357, 26	13	2	3	0
6 広島県尾道市	26~15	13	2~1 (特殊拍)	3	0
7 広島市 (辞典)	?	?	2~1 (特殊拍)	3	0
8 京都 (辞典)	?	(13)	a1	a1	b0
9 京都 (室町期)	?	?	HHLL	HHLL	?
10 京都 (院政期)	?	?	HLLL	HLLL	LHHH, LHLH
11 神戸市 (辞典)	?	?	a1, 13	a1, 13, (b2, b3)	b0
12 南あわじ市	135	-	13~a1 (自由)	13, a1, (b2, a2, a3)	b0
13 徳島市 (辞典)	?	?	a1, 13	a1, 13, (a2, b2)	b0
14 高知県安芸市	1357	-	a1~13 (自由)	a2, (b2), a1	b0
15 高知市上町	1357, 15	(13)	a1	a2/b2~a3 (自由), a1	b0
16 高知市春野町	1357, 15	-	13~a1 (自由)	a2, b2, a1	b0
17 高知県土佐市	1357, 15	-	a1~13 (自由)	a1, (13, b2)	b0
18 鹿児島県甕島	AA	-	A	A/B	B
19 沖永良部島	-3-3	-	-3	-1	-3/-4

i 群の 1 単位形について述べる。『日本語アクセント史総合資料索引篇』等で見ると、院政期京都でも「a1」だったと分かる。また、甕島では「A」で、高起式に対応している。沖永良部島では有核型の「-3」で、低起式に対応しているように見えるが、これは i 群と v 群が合流している為で、この場合、v 群の方に合流したと解釈される。これらのことから、ひとまず、「a1」が「古い」と見ておくことができる。

次に、各方言への変化を考える。i1 群の 1 単位形は基本的には 1 モーラ目に核があるが、規則的な音変化で核が 2 モーラ目にずれている方言もあると見られる。「8, 9, 10 京都」では、院政期から室町期にかけて核がずれていながら (4 モーラ置語を扱う秋永 (1980: 411) はこの点を見落としたか)、現代では再び元に戻っている (中井幸比古の言う「昇核現象」と見られる)。岡山市や「6, 7 広島県」では核がずれたまま戻っていないが、「6, 7 広島県」では 2, 4 モーラ目が特殊拍の語において核がずれていない。他方、「3, 4 東京都」では、規則的な音変化に従えば一旦「2」にずれたあと戻って「1」になったはずで (金田一 2005b: 573)、1 モーラ目が無声化する環境で「2」となっているのは古形の保存と解釈される。

「1, 2 外輪式」では通常、高起式が無核、低起式が有核に対応しているが (上野 2006: 39)、裸では原則「1」で、「と」を付けると「1」のほか「0」も (盛岡市では「4」も) 可能となり、一見して上手く対応していない。青森市では「と」を付けると「1/0」で「擬音語/擬態語」を区別する。盛岡市では「と」を付けると「1/0, 4」で「程度強調 (擬音語を頻繁に含む)/無標」を区別する (「0, 4」の区別は v 群の影響と見る)。対応を解釈するに当たって、「1, 2 外輪式」の「1」は「*13」由来と見る (「と」が付く場合だけ 1 単位形が発生したと考える)。「*a1」が規則的に「0」になる一方で、「*13」は (岡山市のように) しばらく変化せず、比

較的後代になって再度「1」へと変化したと考える（青森市の「(13)」はその痕跡か）。

「a1」を「古い」とする考え方は、各方言への変化を考える上で大きな問題を生じないが、それだけでなく、2単位形「13」との関係を考える上でもよく辻褄が合っている。「13」における「2モーラの形態素」はそれぞれ「a1」で、それらのうち前部要素の「a1」だけが1単位形のアクセントに反映されることは理に適っている（*culminativity* 現象の一種）。

以上のことから、i群の祖形は2単位形「*13」（即ち「*a1.a1」）、1単位形「*a1」と暫定的に見ておく。外輪式については、更なるデータで推論を裏付けて行く必要がある。

ii群に2単位形は確認されていない。後述の「ハロハロニLHLHH」はv群（形容動詞）と見る。「8, 9, 10 京都」では早くも院政期からi群に合流済みで、南あわじ市阿万も同様である。沖永良部島では、i群こそv群に合流しているが、ii群は独立を保っており、有核型であって低起式に対応する。またセグメントが短縮しなければ「クルグルーとう（黒々と、HHHLLH）」のように、規則的に「と」の直前に引き音が現れる（セグメントが短縮したら「アーアーとう（赤々と、HLLLH）」などとなる）。甌島でも一部の語彙にこの引き音が見られる（*lexical diffusion* 的に引き音が失われつつある）が、甌島では前部要素の型が分かるものはほぼ例外無く、前部要素の型が全体の型に一致していて、共時的にii群の内部に型の対立がある。これは九州二型アクセントに広く見られる複合語規則で、中央式のいわゆる「式保存の法則」と対応するものであることが従来から指摘されている。沖永良部島や、既に述べた高知県の状況を考慮に入れば、甌島におけるii群の内部の型の対立が「古い」特徴であるとは考えにくい。ii群の黎明期にそのような対立があった可能性は決して低くないが、甌島が示す特徴は、複合語規則からの類推によって生じた「新しい」特徴と見ておくのが穏当である。

沖永良部島で（低起式に対応する）有核型になり、「1, 2 外輪式」でも（低起式に対応する）有核型になる点を踏まえると、南北朝期の体系変化前は「*LLLH(L), *LLLF(L)」のような形で（引用の「と」は古くは低接（秋永 1991: 193）⁵³、これが南北朝期の語頭隆起で「*HLLL(L)」に変化し、その後、京都のように核が右にずれたり戻ったりしたかもしれないが（中井 2003: 101-103）、i群とii群の対立は保たれ、「14, 15, 16 高知県」の「13~a1」と「a2」の対立に至っていると考えられる。「3, 4, 5, 6, 7 中輪式・内輪式」では「13~a1」と「a2」の対立が一旦「13~2」と「3」の対立に変化したあと、「3, 4 中輪式」では「2」が「1」に巻き戻ったと見られる。「1, 2 外輪式」では「a2」を出発点として、上昇・下降位置が規則的に右にずれて青森市の「3」が成立したと見られる（3拍語「頭」類の変化を参照）。

盛岡市では基本的にi群に合流済みだが、「苛々と、ウカウカと、懲り懲りと、冴え冴えと、シミジミと、シラジラと、高々と、高々（副詞）、晴々と、冷え冷えと、深々と、仄々と、惚れ惚れと、ムラムラと」（情意表出的）が「2」で現れ、恐らく「b2」の痕跡かと考えられる。なお、青森市石江の話者も「イガイガと、高々（副詞）、ツクヅクと、長々と、冷え冷えと」

⁵³ 中澤（2013）によれば、南あわじ市沼島のii群の語彙的な無標形HHLH-Lは*LLLH-Lの痕跡を留めると推定される。また同市三原町にもHLLL-L型のii群が見られるが、淡路島では一般的にはi群に合流済みという。沼島ではこのほか「HHLF（目の前）」が見られ、これによりii群の祖形の候補は*LLLH-Lに絞られる。但し南あわじ市阿万のように本稿の論に即した網羅的な調査を実施したわけではないため、今後の調査が待たれる。

で「3,2」を併用する。これらの「2」は、「3」とは直接比較できないと考える。

以上のことから、ii群の祖形は1単位形「*LLLH(L), *LLLF(L)」のいずれかと暫定的に見ておく。式、昇り核、下げ核の順に記号化するなら「*b40, *b44」(のいずれか)と書ける。

v群の2単位形「LHLH(H)」は、日本書紀に「サワサワニ(前田本), ハロハロニ(岩崎本など)」の2例が例証される(助詞「に」は古くは高接(秋永1991:193))。但し「サワサワニ」は鈴木編(2003)の記述が誤りで、前田本の影印(2002:33)を直接確認されたい。

1単位形「LHHH(H)」は、京都の文献や、現代の「14,15,16,17高知県」に見られる。但し助動詞「ぢゃ, じゃ, や」は低く付いて「LHHH(L)」となる。現代京都や南あわじ市では上昇位置が遅れて、「LLLL(H)(~に), LLLH(L)(~や)」となる。甕島で「B」, 沖永良部島で有核型となり、低起式に対応している。「3,4,5,6,7中輪式・内輪式」では、3拍語「兎」類(LHH)が「形」(HHH)類に早期に合流したと推定される点(金田一2005b:571)と並行して、「LHHH(H)」は「HHHH(H)」を経由して再び「LHHH(H)」に至ったと見られる。

このほか、東村山市には語用論的意味の異なる「0/4」のvariationがある。「4」の方は2単位形からの変化が推測される:「LHLH(H)>*LHLH(L)>*LHHH(L)>*HHHH(L)>LHHH(L)」。ここで「LHLH(H)>*LHLH(L)」と記したのは、助詞が院政期には有していた固有のアクセント(秋永1991:193)を失うことで、豊語構造からの類推によって形態素内部境界の下がり目(≒下げ核)が語幹末にも複製されるという変化を表わす。ここで「*LHLH(L)>*LHHH(L)」と記したのは、院政期京都における2つのvariationから推定される「*LHLH>*LHHH」という文献時代以前に生じただろう変化と同じものである。また、語末核は「~上」に、~所]が」のように、「古い」ものが保持される例が指摘されている(上野2006:38)。

また、青森市では無標形「0」に対して「話し手の不意の驚きを表出する」表出形「(4)」が(高山2012d,2013a)、盛岡市では無標形「(0)」(但し使用頻度は比較的低い)に対して(ただの)表出形「4」が存在する。3拍語「兎」(LHH)類は規則通りなら「1」となるはずなので、中輪式・内輪式と同様にして、4拍語において例外的に早期に3拍語「形」(HHH)類へと合流し、東村山市と同様に語幹末核の有無の区別を保ったと、ここでは解釈しておく。

以上より、v群の祖形は2単位形「*LHLH」, 1単位形「*LHHH」と暫定的に見ておく。式、昇り核、下げ核の順に記号化して、2単位形「*b20.b20」, 1単位形「*b20」と書ける。

14. 通時的考察(iii群, iv群, vi群)——漢語の情態副詞・形容動詞, 和語のただの副詞

続いて、iii群, iv群, vi群の音韻対応を通時的に解釈し、祖形を考察する上での主要な論点を取り上げて論ずる。また、現段階での祖形案を提示する。前節の議論と本稿のデータを踏まえ、下表を示す。i群・ii群・v群は簡略表記する。漢語は和語と異なり、祖語の段階から共有されていたとは言えないが、共通の祖形が存在したと「仮定」して考える。

iii群とvi群(漢語の情態副詞・形容動詞)の祖形は、中央式と同様の「*a0」と暫定的に見ておく。「1,2外輪式」は「*a0」の高起式が反映して無核で現れると考える。甕島や沖永良部島における対立は類推か、アクセントの祖形自体が共有されていないと見る。「3,4,5,6,7

中輪式・内輪式」では「0」の他に「3」が見られるが、ii群からの類推と見る。同様のことをiv群でも考えて、iv群の外輪式・中輪式・内輪式の形は本来「0」と見る。iv群（和語のただの副詞）の祖形は、「*a0」に関してはiii群・vi群と同じ理屈で、暫定的に認められる。

「*b20」に関しては問題があつて、第一に、院政期京都では「b40（中々）、b00（時々）」（南北朝期の語頭隆起で高起式に変化してしまうもの）は確認されていても「b20」は確認されていない。第二に、中央式の中でも「b0」が一定数見られるのは京都と安芸市のみであつて、他の地点では語例が少ない。故にここでは「iv群」の祖形は「*a0」のみと、暫定的に見ておく。南北朝期の体系変化前には低起式のものも一定数存在したかもしれないが、体系変化後は有核型に変化してしまうので、「iv群」という括りの中では扱うことが難しい。

表 16. 日本語諸方言の4モーラ畳語（iii群、iv群、vi群）のアクセント対応

	i群	ii群	iii群	iv群	vi群	v群
1 青森市	1,0	3,(2)	0	0	0	0/(4)
2 岩手県盛岡市	1,0,4	(2)	0	0	0	(0)/4
3 東京都東村山市	1~2	3	0,(3)	0	0,(3)	0/4
4 東京（辞典）	1~2	3	0,3	0	0,(3)	0
5 岡山市	2	3	3	0,3	0,3	0
6 広島県尾道市	2~1	3	3	0,(3)	0,3	0
7 広島市（辞典）	2~1	3	3	0,3	0,3	0
8 京都（辞典）	a1	a1	a0	a0/b0	a0	b0
9 京都（室町期）	a2	a2	?	a0	?	?
10 京都（院政期）	a1	a1	?	a0, b40, b00	?	b20, 24
11 神戸市（辞典）	a1, 13	(b2, b3)	a0	a0, (b0)	a0	b0
12 南あわじ市	13~a1	(b2, a2, a3)	a0	a0, (b0)	a0	b0
13 徳島市（辞典）	a1, 13	(a2, b2)	a0	a0	a0	b0
14 高知県安芸市	a1~13	a2, (b2)	a0	a0/b0	a0	b0
15 高知市上町	a1	a2/b2	a0	a0, (b0)	a0	b0
16 高知市春野町	13~a1	a2, b2	a0	a0, (b0)	a0	b0
17 高知県土佐市	a1~13	(b2)	a0	a0, (b0)	a0	b0
18 鹿児島県甕島	A	A/B	A/B	A/B	A/B	B
19 沖永良部島	-3	-1	0, -3	0/-3	0, -3	-3/-4

15. 通時的考察（vii群、viii群、ix群）——複合名詞や派生名詞など

続いて、vii群、viii群、ix群の音韻対応を通時的に解釈し、祖形を考察する上での主要な論点を取り上げて論ずる。また、現段階での祖形案を提示する。前々節・前節の議論と本稿のデータを踏まえ、下表を示す。i群・ii群・v群は紙幅の都合で簡略表記する。再確認すると、九州二型の「A・B」や、外輪式・沖永良部島国頭の無核・有核は、院政期京都の「a・b」に対応することが知られている。vii群の名詞は複数を表わす場合もあり、(ii群に似て)複合に近い派生と見る。viii群の名詞はv群からの、ix群の名詞はi群からの派生と見る。

vii群は、外・中・内輪式では、祖形を「*2/*3」と暫定的に見ておく。この祖形の要点は前部要素の核の有無と位置を全体の核の位置に反映させる点にあり、盛岡市八幡町の話者の状態に鑑みれば、語例は少ないものの「数々」(ix群)のような語の「*1」もこの複合語規則

の一部と考えられる。「3,4 東京都」では「2」に合流し, 「5,6,7 中国地方」では「3」に合流したと考える。他方で中央式・九州二型・琉球多型では, 祖形を「*a2/*b22」と暫定的に見ておく。この祖形の要点は前部要素の式を全体の式に反映させる点にある (表 18 参照)。

viii 群は, v 群からの派生で説明が付くものについては, 祖形を「*b20,*b20.b20」と暫定的に見ておく。他に「*a0」の系列が混ざっていて, iii 群・iv 群・vi 群と同じ対応を示すように見えるが, v 群からの派生関係を重視するため, 「viii 群」という括りの中では扱わない。

ix 群は, 祖形を「*a1,*a1.a1」と暫定的に見ておく。i 群に見られる核の位置のずれは, ix 群には殆ど確認できない点が注目される。甕島の「B」は類推で生じたと見る。沖永良部島では i 群が v 群に合流するため ix 群も viii 群に近づいて有核型が現れるが, 感動詞「FuriFuri (これこれ)」など無核型で現れる語もある。中央式に「b3」が見えるが, 原因は不明である。

表 17. 日本語諸方言の 4 モーラ畳語 (vii 群, viii 群, ix 群) のアクセント対応

	ix 群	i 群	ii 群	vii 群	v 群	viii 群
1 青森市	1, 13	1, 0	3, (2)	2/3	0/ (4)	0, 4
2 岩手県盛岡市	1, 13	1, 0, 4	(2)	2/3	(0)/4	0, 4
3 東京都東村山市	1	1~2	3	2	0/4	0/4
4 東京 (辞典)	1	1~2	3	2	0	0, 4
5 岡山市	13, 1	2	3	3	0	0
6 広島県尾道市	1, 13	2~1	3	3	0	0, 4
7 広島市 (辞典)	1	2~1	3	3	0	0
8 京都 (辞典)	a1, 13, b3	a1	a1	a2/ b2	b0	a0/ b0
9 京都 (室町期)	a1, a2	a2	a2	a2/ b2	?	a0
10 京都 (院政期)	13	a1	a1	a2/ b22	b20, 24	b20, 24
11 神戸市 (辞典)	a1, 13	a1, 13	(b2, b3)	b2, b3	b0	a0/ b0
12 南あわじ市	13, a1	13~a1	(b2, a2, a3)	a2/ b2	b0	a0/ b0
13 徳島市 (辞典)	13, a1	a1, 13	(a2, b2)	b2	b0	a0
14 高知県安芸市	a1, 13, b3	a1~13	a2, (b2)	a2/ b2	b0	a0/ b0
15 高知市上町	a1, 13, b3	a1	a2/ b2	a2/ b2	b0	a0/ b0
16 高知市春野町	13, a1, b3	13~a1	a2, b2	a2/ b2	b0	a0/ b0
17 高知県土佐市	a1, 13, b3	a1~13	(b2)	a2/ b2	b0	a0/ b0
18 鹿児島県甕島	A/B	A	A/B	A/B	B	A/B
19 沖永良部島	0, -3, -4	-3	-1	0/ -3	-3/ -4	0, -3/ -4

表 18. 中央式・九州二型・琉球多型の 2 拍語 60 語とその畳語の「式保存」(表 10 参照)

番号	漢字	類	仮名	8 京	8 豊	9 淡	9 豊	10 高	10 豊	11 院	11 豊	12 甕	12 豊	13 沖	13 豊	13 沖 畳語 segments
1	口	1	くち	a0	a2	a0	a2	a0	b2	a0	#	A	A	a0	b3]ku c]i[guc]jini
2	此	1	これ	a0	a2	a0	13	a0	a2	a0	#	A	A	#	#	
3	末	1	すゑ	a0	a2	a0	a2	a0	a2	a0	#	A	A	a0	a0]suezuema[de
4	其	1	それ	a0	b2	a0	a2	a0	a2	a0	#	A	A	#	#	
5	暇	1	ひま	a0	a2	a0	a2	a0	a2	a0	#	A	A	a0	a0]hjimah]jima[ni
6	道	1	みち	a0	a0	a0	a0	a0	a0	a0	#	A	A	a0	a0]mic]jmic]jini[ti
7	共	-	とも	a0	a0	a0	a2	a0	a2	a0	#	A	A	a0	a0]tumudumu[ni
8	誰	1?	たれ	a0	a2	a0	a2	a0	a2	a0	#	A	A	a0	a0]tarudaruf]ga
9	謎	-	なぞ	b2	b0	a0	a0	a0	a0	ba	#	A	A	#	#	
10	国	1	くに	a0	a2	a0	a2	a0	a2	a0	#	A	A	a0	a0]kuniguni[nu
11	品	1	しな	a0	a2	a0	a2	a0	a2	a0	a2	A	A	a0	a0]sjnaz]jina[nu

番号	漢字	類	仮名	8京	8豊	9淡	9豊	10高	10豊	11院	11豊	12飯	12豊	13沖	13豊	13沖 豊語 segments
12	端	1	はし	a0	a2	a0	a2	a0	a2	a0	#	A	A	a0	a0]hasjiba[sji
13	先	1	さき	a0	a2	a0	a2	a1	a2	a0	#	A	A	a0	a0]saQcjiRzaQcjiR[nu
14	程	1?	ほど	a0	a0	a0	a0	a0	b0	a1	#	A	A	#	#	
15	否	-	いや	a0	a0	#	a0	a0	a0	#	ax	A	A	#	#	
16	偶	-	たま	a0	a0	a0	a0	a0	a0	#	ax	B	A	b2	a0]tamata[ma
17	様	1?	さま	a1	a0	a0	a2	a0	a2	a0	#	B	B	#	b3]sa]ma[zamanu
18	人	2?	ひと	a1	a2	a1	a2	a1	a2	a1	ax	A	A	a0	a0]cjuRzjuR[nu
19	又	-	また	a1	a1	a1	13	a1	a1	a1	a0	A	A	b2	a0]matama[ta
20	方	2	かた	a1	a2	a1	a2	a1	a2	a1	ax	A	A	#	#	
21	下	2	しも	a1	a2	a0	a2	a1	a2	a1	#	A	A	#	#	
22	次	2	つぎ	a1	a1	a1	13	a1	a2	a1	#	A	A	a0	b3]cu]gi[cugi
23	町	2	まち	a1	a2	a1	a2	a1	a2	a1	#	A	A	a0	a0]macjimacji[nu
24	皆	2	みな	a1	a1	a1	a2	a1	a2	a1	#	A	A	#	#	
25	村	2	むら	a1	#	a1	a2	a1	a2	a1	#	A	A	#	#	
26	毬	2?	いが	b2	#	b0	b0	b2	b0	a1	#	B	B	#	#	
27	向	-	むき	b2	a0	b2	a0	a0	a0	a1	#	A	A	a0	a0]mukimuki[nu
28	其	4?	そこ	b0	#	b0	b2	b2	b2	b0	#	B	B	#	#	
29	後	4	あと	b0	b2	b0	b2	b2	b2	b0	#	B	B	b2	b3]atu[atunu
30	数	4	かず	b0	b2	b0	b2	b0	b2	b0	#	B	B	#	#	
31	隅	4	すみ	b0	b2	b0	b2	b0	b2	b0	#	B	B	#	#	
32	中	4	なか	b0	a0	b0	a0	b0	a0	b0	b40	B	A	b2	b3]na]R[naRnu
33	何	4	なに	b0	b2	b0	b2	b0	b2	b0	#	B	B	b2	b2]nuR]nuR[nu
34	我	4	われ	b0	b2	b0	b2	b2	b2	b0	#	B	B	b2	#	
35	未	-	まだ	b0	#	b0	b2	b0	b2	b0	#	B	A	b2	a0]madama[da
36	取	(2)	とる	b0	b2	b0	b2	b0	b2	b0	#	B	B	b1	b3]tu]i[dui
37	見	(2)	みる	b0	b2	b0	b2	b0	b2	b0	#	B	B	b1	#	
38	先	-	まづ	a1	a1	a1	13	a1	a2	b1	#	A	B	#	#	
39	能	-	よく	a1	a0	a1	a0	a1	a1	b1	#	A	A	b1	a0]jokujo[ku
40	前	5	まへ	a1	b2	a1	a2	a1	a2	b2	#	B	B	b2	b3]me]R[meR]kara
41	声	5	こゑ	b2	b2	b2	b2	b2	b2	b2	b22	B	B	b2	#	
42	更	-	さら	b2	b2	b2	b2	b2	b2	b2	#	A	B	#	#	
43	常	5	つね	b2	b2	b2	b2	b2	b2	b2	#	B	B	#	#	
44	唯	5?	ただ	b0	b2	b0	b2	b0	b2	b2	#	B	B	b2	#	
45	尚	-	なほ	b0	b2	b0	b2	b0	b2	b2	#	A	A	#	#	
46	粉	-	こな	b0	b0	b0	b0	b0	b0	bx	#	B	B	b1	b3]ko]na[gona
47	神	3	かみ	a1	a2	a1	a2	a1	a2	bb	#	B	B	b1	b3]ha]mi[gami
48	半	-	はに	a1	b3	a1	b3	a1	b3	#	bx	B	B	b1	a0]haNhaN]ni
49	家	3	いへ	a1	a2	a1	a2	a1	a2	bb	#	B	B	#	#	
50	色	3	いろ	a1	b2	a1	b2	a1	b0	bb	#	B	B	b1	#	
51	草	3	くさ	a1	a2	a1	a2	a1	b2	bb	bx	B	B	b1	#	
52	事	3	こと	a1	a2	a1	a2	a1	a2	bb	#	B	B	b1	b3]ku]tu]gutunu
53	島	3	しま	a1	a2	a1	a2	a1	a2	bb	#	B	B	b1	b3]sj]ma]zjima
54	月	3	つき	a1	b2	a1	a2	a1	a2	bb	#	B	B	b1	b3]cj]cj]zjicj]nu
55	時	3	とき	a1	b0	a1	b2	a1	a2	bb	b20	B	B	b1	b3]tu]ki[dukinu
56	年	3	とし	a1	a2	a1	a2	a1	a2	bb	#	B	B	b1	b3]tu]sj]dusj]nu
57	節	3	ふし	a1	b2	a1	a2	a1	a2	bb	#	B	B	a0	a0]Fusjibusj]nu
58	山	3	やま	a1	a2	a1	a2	a1	a2	bb	#	B	B	b1	a0]jamajama]nu
59	元	3?	もと	a1	b3	b2	b0	a1	b0	bb	#	B	B	b2	#	
60	後	3?	のち	a0	a0	a0	a0	a0	a2	bb	#	A	A	#	#	
番号	漢字	類	仮名	8京	8豊	9淡	9豊	10高	10豊	11院	11豊	12飯	12豊	13沖	13豊	13沖 豊語 segments

16. おわりに——アクセント・セグメントの祖形と複合語規則の祖体系、今後の課題

以上より、単純語扱いの畳語の祖形としては、i 群・ix 群「*a1.a1, *a1」、ii 群「*b40 か*b44」、v 群・viii 群「*b20.b20, *b20」、iii 群・iv 群・vi 群「*a0」を暫定的に見ておく。今回扱えなかったもの（祖形の候補）は今後の課題となるが、調査項目を増やして解決できる問題とは考えにくく、むしろ「語群の精緻化」によって最終的には候補から外れると考えられる。

また複合語扱いの畳語 (vii 群) の複合語規則としては、「(1) 前部 (=後部) 要素が「0, 2」なら複合語は「2」、(1) なら「3, 1」になる」というもの (=盛岡市八幡町の話者の規則) と、「(2) 前部要素の式が「a」なら複合語は「a2」、(b) なら「b2」になる」というものの2種類と、それらの変形と見なすことのできるものが分布している。(1) のタイプについては、西日本の外輪式などでの分布を今後調べて行く必要がある。上野 (1997) によれば、通常の複合名詞は大まかには、「(1) 後部要素の核で決まるタイプ」と「(2) 前部要素の式で決まるタイプ」に分かれ、歴史的に見ると、古くは (1) (2) が両立していたとされる。畳語における2種類の複合語規則も状況がよく似ているが、通常の複合名詞との違いの解明や、(1) (2) が両立している例の搜索が（すぐにも取り組むべき）今後の課題となる。

本土諸方言のどこにも、i 群・ii 群の無標形に語中・語幹末長音が現れない以上、セグメントは長音の無い形を本土と琉球の共通の祖形と見ておくのが穏当である。琉球方言でいかにして、例えばアクセントの影響で、長音が発達したかについては今後の課題となる。関連する研究には、服部 (1979a, 1979b)、上野 (1996)、松森 (1996)、新田 (2005) 等がある。但し今後の課題と言っても、単純語の名詞・動詞・形容詞のアクセントの比較研究（「系列別語彙」を用いた研究）自体が、琉球ではまだ発展途上の段階にあり、その比較研究の進展を待った上でなければ、4 モーラ畳語単独で琉球の長音を論ずることは、恐らくできない。

調査項目に関しては、語彙数の少ない ii 群などの語（「デ[カデ]カと、kanaganaRtu」等）や、院政期に見られる語（「[日]に[日]に、タ[ガタガ」等）については、日本のどこかに残っていることを期待して、積極的に調査項目に取り入れるべきであろう。ただ、調査項目を増やせば話者への負担が増して調査時間が嵩むので、今回の調査で不要と判明した調査項目を削り、それと入れ換える形で取り入れることが望ましい。今回は初回の調査ということで、一見して「不要な語・最近生じた語」も、特別な発音が現れるかどうか調べる為に入れていたが、「[撫]で撫で」のような語が結果として論の役に立ったので、その方針自体は正しかったと考える。とは言え実験的段階は過ぎ、今後は「やはり不要だった語」を削ることができる。

類別語彙や系列別語彙は「語群の精緻化」を追求するが、4 モーラ畳語では「セグメントの方言形、アクセントの併用形、語用論的意味を区別するアクセント」の問題が邪魔をして、進めにくいことが予想される。とは言え、現段階でも音韻対応を見ることはできるので、「語群の精緻化」の追求は必須というわけではなく、また恐らくあまり上手く行かない。その原因は、名詞などのような「語彙的」で「恣意的」な型の区別だけでなく、4 モーラ畳語では「文法的」で「派生関係」にある型の区別を、それぞれ個別の語群として設定する為である。つまり「語彙的な語群」と「文法的な語群」が連続的に、渾然一体となって設定されている。

参考文献

- Alpher, Barry (1994) Yir-Yoront ideophones. In: Leanne Hinton, Johanna Nichols and John J. Ohala (eds.) *Sound symbolism*, 161-177. Cambridge: Cambridge University Press.
- Igarashi, Yosuke (2006) A preliminary analysis of the relation between lexical pitch accent and prosodic phrasing in Goshogawara Japanese. In: 『第20回日本音声学会全国大会予稿集』, 141-146.
- Kageyama, Taro (2007) Explorations in the conceptual semantics of mimetic verbs. In: Bjarke Frellesvig, Masayoshi Shibatani and John C. Smith (eds.) *Current Issues in the History and Structures of Japanese*, 27-82. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Tokunaga, Akiko (2012) The Okinoerabu dialect: A study on onomatopoeia in an endangered language. In: *International Workshops on Corpus Linguistics and Endangered Dialects*, October 2012. Tachikawa: National Institute for Japanese Language and Linguistics.
- 秋永一枝 (1980) 『古今和歌集声点本の研究』研究篇上: 404-412. 東京: 校倉書房.
- 秋永一枝 (1991) 『古今和歌集声点本の研究』研究篇下: 41-121, 193. 東京: 校倉書房.
- 秋永一枝 (1999) 「江戸アクセントから東京アクセントへ」『東京弁アクセントの変容』: 33-52. 東京: 笠間書院.
- 秋永一枝ほか編 (1997) 『日本語アクセント史総合資料索引篇』東京: 東京堂出版.
- 石塚晴通編 (2007) 『尊経閣文庫本日本書紀 本文・訓点総索引』東京: 八木書店.
- 内間直仁・野原三義 (2006) 『沖縄語辞典—那覇方言を中心に』東京: 研究社.
- 上野善道 (1985) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(1)」『日本学士院紀要』40(3): 215-250.
- 上野善道 (1987) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(2)」『日本学士院紀要』42(1): 15-70.
- 上野善道 (1988) 「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』: 35-73. 東京: 東京大学言語学研究室.
- 上野善道 (1989) 「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』: 178-205. 東京: 明治書院.
- 上野善道 (1992) 「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-13.
- 上野善道 (1996) 「名瀬市芦花部・有良方言の名詞のアクセント体系」『東京大学言語学論集』15: 3-68. 東京: 東京大学言語学研究室.
- 上野善道 (1997) 「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」杉藤美代子監修『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』: 231-270. 東京: 三省堂.
- 上野善道 (2000) 「奄美方言アクセントの諸相」『音声研究』4(1): 42-54.
- 上野善道 (2002) 「アクセント記述の方法」『現代日本語講座 3』: 176-186. 東京: 明治書院.
- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.
- 上野善道 (2009) 「句頭の上昇は語用論的意味による」『月刊言語』38(12): 84-85. 東京: 大修館書店.

- 岡村隆博・沢木幹栄・中島由美・福嶋秩子・菊池聡 (2009) 『徳之島方言二千文辞典』改訂版。
松本：徳之島方言の会。
- 沖繩言語研究センター (2000) 『今帰仁方言音声データベース』
(URL: <http://ryukyu-lang.lib.u-ryukyu.ac.jp/nkjin/index.html>)
- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子編 (1977, 1980) 『奄美方言分類辞典 上巻・下巻』東京：
笠間書院。
- 小野正弘編 (2007) 「意味分類別さくいん」『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』：
33-64. 東京：小学館。
- 菊千代・高橋俊三 (2005) 『与論方言辞典』東京：武蔵野書院。
- 金田一春彦 (2005a) 「日本の方言」『金田一春彦著作集』7：311-657. 東京：玉川大学出版部。
(『日本の方言』(1975；教育出版)の増補版(1995)の再録)
- 金田一春彦 (2005b) 「アクセントの分布と変遷」『金田一春彦著作集』8：536-585. 東京：玉
川大学出版部。(初掲は『岩波講座日本語 11 方言』(1977))
- 金田一春彦 (2005c) 「移りゆく東京アクセント」『金田一春彦著作集』9：39-76. 東京：玉川
大学出版部。(初掲は『国語文化』2(13), 3(3), 4, 6 (1942-1943))
- 金田一春彦監修・秋永一枝編 (2001) 『新明解日本語アクセント辞典』東京：三省堂。
- 城辺スマフツ研究会編 (2003, 2012) 『城辺スマフツ辞典 上巻・下巻』宮古島：城辺町教育委員
会，宮古島市教育委員会。
- 工藤真由美 (2007) 「愛媛県宇和島市方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準
語研究を越えて—』：119-146. 東京：ひつじ書房。
- 窪菌晴夫 (1995) 「イントネーション規則と枝分かれ制約」『語形成と音韻構造』：98-103. 東
京：くろしお出版。
- 窪菌晴夫 (2012) 「鹿児島県甕島方言のアクセント」『音声研究』16(1)：93-104.
- 児玉望 (2012) 「甕島の二型アクセント—自発談話音声資料の分析」『ありあけ 熊本大学言語
学論集』11：47-68. 熊本：熊本大学言語学研究室。
- 下地理則 (2006) 「南琉球語宮古伊良部島方言」『文法を描く』1：84-117. 東京：東京外国語
大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
- 鈴木豊編 (2003) 『日本書紀人皇卷諸本 声点付語彙索引』東京：早稲田大学文学部。
- 高山林太郎 (2011a) 「岡山県妹尾方言における両唇ふるえ音」『日本方言研究会第 92 回研究
発表会発表原稿集』：27-34.
- 高山林太郎 (2011b) 「岡山県妹尾方言におけるジャとナの含意」『東京大学言語学論集』31：
317-333. 東京：東京大学言語学研究室。
- 高山林太郎 (2012a) 「伝承童謡ニラメッコの表現と歴史」『国際児童文学館紀要』25：1-14.
大阪：財団法人大阪国際児童文学館。
- 高山林太郎 (2012b) 「四モーラ置語を音調と意味で分類する試み」『語彙・辞書研究会第 41 回
研究発表会予稿集』：17-24. 東京：三省堂。

- 高山林太郎 (2012c) 「岡山市方言の複合動詞のアクセント」『東京大学言語学論集』32:305-332.
東京：東京大学言語学研究室.
- 高山林太郎 (2012d) 「東村山市方言の四モーラ畳語の形容動詞の語末核の有無による意味対立」
『日本語文法学会第13回大会発表予稿集』:169-176.
- 高山林太郎 (2012e) 「東村山市方言の複合動詞のアクセント」『日本言語学会第145回大会予稿集』:488-493.
- 高山林太郎 (2013a) 「音調が文法的・語用論的意味を表わす場合の音韻解釈—日本語諸方言を例に」. 第8回音韻論フェスタ.
- 高山林太郎 (2013b) 「句頭の上昇の語用論的な意味と機能」. 第126回関東日本語談話会.
- 高山林太郎 (2013c) 「系列別語彙を用いたアクセント調査—沖永良部島国頭方言を例に—」
『JLVC2013 予稿集』:141-150.
- 高山林太郎 (2013d) 「四モーラ畳語の情態副詞と形容動詞のアクセントの通時的考察」『日本語学会2013年度春季大会予稿集』:209-214.
- 高山林太郎 (2013e) 「四モーラ畳語のアクセントの品詞による合流と品詞を越えた合流」『日本語学会第146回大会予稿集』:418-423.
- 高山林太郎 (2013f) 「東村山市と岡山市の複合動詞の有標アクセントについて」. 日本音声学会第327回研究例会.
- 高山林太郎 (2013g) 「情的意味を表わすふるえ音・吸着音の日本列島周辺における分布」『第27回日本音声学会全国大会予稿集』.
- 高山林太郎 (2013h) 「四モーラ畳語と基層方言—東京都東村山市、鹿児島県甕島を例に—」『日本語学会2013年度秋季大会予稿集』.
- 高山林太郎・中澤光平・大槻知世 (2012a) 「青森市若年層のアクセントについて—ダウンステップ、低平化、高平化—」『第26回日本音声学会全国大会予稿集』:19-24.
- 高山林太郎・中澤光平・大槻知世 (2012b) 「青森市方言における語末核の「上昇の遅れ」」『日本語学会2012年度秋季大会予稿集』:159-166.
- 滝浦真人 (2007) 「終助詞「か／よ／ね」の意味機能とコミュニケーション機能——モダリティとポライトネスの観点から」麗澤大学言語研究センター第31回研究セミナー発表.
- 竹田晃子 (2011) 「鹿児島県喜界町方言におけるオノマトペの語彙的特徴」木部暢子他編『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書』:139-162. 立川：国立国語研究所.
- 徳永晶子 (2012a) 「沖永良部方言におけるオノマトペの言語地理学的研究」. 国際沖縄研究センター若手研究者育成セミナー「消滅危機言語としての琉球語研究の意義と目的」2012年1月発表. 沖縄：琉球大学（沖縄言語研究センター）.
- 徳永晶子 (2012b) 「奄美諸島のオノマトペ」. 「オノマトペ友の会第9回例会」2012年7月発表.
東京：東京大学教育学研究科.
- 中井幸比古編 (1997) 『高知市方言アクセント小辞典』神戸：神戸市外国語大学.

- 中井幸比古ほか編 (1999) 『徳島市方言アクセント小辞典』神戸：私家版。
- 中井幸比古ほか編 (2001) 『兵庫県南部方言アクセント小辞典』神戸：私家版。
- 中井幸比古 (2003) 「アクセントの変遷」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』：85-108.
- 中澤光平 (2013) 「南あわじ市沼島方言のアクセントにおける2単位形の共時的および通時的分析」『日本方言研究会第96回研究発表会発表原稿集』。
- 中谷眞也 (2011) 『伝承 盛岡弁の語り口』盛岡：杜陵印刷。
- 西山佑司 (2004) 「語用論の基礎概念」『言語の科学7 談話と文脈』東京：岩波書店。
- 新田哲夫 (2005) 「アクセント論——能登島の「式」の変化を考える」『国文学—解釈と教材の研究—』50(5)：34-43.
- 仁田義雄 (2004) 「文法とは何か」『言語の科学5 文法』東京：岩波書店。
- 沼田善子 (2000) 「とりたて」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』東京：岩波書店。
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』東京：ひつじ書房。
- 服部四郎 (1979a) 「日本祖語について (21)」『月刊言語』8(11)：97-107.
- 服部四郎 (1979b) 「日本祖語について (22)」『月刊言語』8(12)：100-114.
- 服部四郎 (1984) 『音声学』：73. 東京：岩波書店。
- 平山輝男監修・森下喜一編 (1986) 『岩手方言アクセント辞典』東京：第一書房。
- 福島和郎・岩崎庸男・渋谷昌三 (2006) 「終助詞「よ」と「ね」に関する研究の動向」『目白大学心理学研究』2：65-74. 東京：目白大学。
- 藤崎博也 (1994) 「韻律研究の諸側面とその課題」『日本音響学会平成6年度秋季研究発表会講演論文集』1：287-290.
- 編集委員会編 (2002) 『日本国語大辞典第二版』東京：小学館。
- 前川喜久雄 (2002) 「研究室から：失われた意味を求めて」『国語研の窓』10.
- 前川喜久雄 (2004) 「音声学」『言語の科学2 音声』東京：岩波書店。
- 前田育徳会尊経閣文庫編 (2002) 『日本書紀』東京：八木書店。
- 馬瀬良雄編 (1994) 『広島市方言アクセント辞典』広島：中野出版企画。
- 松森晶子 (1996) 「琉球における2音節語第4・5類の語頭長音節をめぐる諸問題—北琉球祖語のアクセント再建にむけて—」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点』下巻：1130-1147. 東京：明治書院。
- 松森晶子 (2000) 「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から—」『音声研究』4(1)：61-71.
- 松森晶子 (2012) 「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」『音声研究』16(1)：30-40.
- 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典 本文篇』那覇：沖縄タイムス社。
- 三宅知宏・高木千恵・松丸真大 (2012) 「確認要求的表現と対照方言学」『日本語文法学会第13回大会発表予稿集』：29-58.
- 山口仲美 (2002) 『犬は「びよ」と鳴いていた 日本語は擬音語・擬態語が面白い』東京：光文社。

An Attempt at Cross-dialectal Comparison of 4-Mora Reduplicated Words in Japanese Dialects

TAKAYAMA Rintaro

takayama_rintaro@nifty.com

Keywords: Japanese dialects, Comparative method, 4-mora reduplicated words, Accent, Long vowel.

Abstract

In this paper, 4-mora reduplicated words (such as *pikapika-to*, *akaaka-to*, *rakuraku-to*, *tamatama*, *pikapika-da*, *manman-da*, *shimajima-ga*, *butsubutsu-ga*, and *wanwan-ga*) in Japanese dialects (such as Aomori City, Morioka City, Higashimurayama City, Tokyo, Okayama City, Onomichi City, Hiroshima City, Kyoto, Kobe City, Awaji Island, Tokushima City, Kochi Prefecture, Koshiki Island, and Okinoerabu Island dialects) are compared cross-dialectally, trying to reconstruct their accents (“*HLHL-L ~ *HLLL-L”, “*LLLH-L”, “*HHHH-L”, “*HHHH”, “*LHLH ~ *LHHH”, “*HHHH”, “similar to compound nouns”, “*LHLH ~ *LHHH” and “*HLHL ~ *HLLL” respectively) in the proto-language of both mainland Japanese dialects and Ryukyuan dialects. Emergent long vowels in Ryukyuan segments (such as *pikaapika-tu* and *akaakaa-tu*) which may have been lengthened by their ancient accents are also considered in this paper.

(たかやま・りんたろう 東京大学大学院博士後期課程)

